

# アイノテ世界樹日記

すたりむ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界樹の迷宮のプレイ日記を基にした二次創作です。

詳しい情報は最初の「ごあいさつ」をご参照ください。（4月18日から公開します）

古い作品ですが、原作愛にだけは溢れている作品だと思います。

よろしくお願いします。

# 目次

アイノテ世界樹日記—ごあいさつ

1

第一階層：デビュー、試行錯誤、そして勝

利 5

第二階層：探索、栄光、そして挫折

17

第三階層（1）：休養、修練、そして死闘

32

第三階層（2）：探索、搜索、そして空振

り 49

第四階層（1）：栄光、悲劇、そして敗北

58

第四階層（2）：試練、試練、そして試練

70

第四階層（3）：皆伝、決意、そして死闘

84

第五階層（1）：青と白 93

第五階層（2）：休養、深層、そして馬鹿

101

第五階層（3）：始末、復活、そして呪い

112

第六階層（1）：リハビリ、訓練、そして

血戦 120

第六階層（2）：散るもかなり 129

エピソード：次の冒険へ 140

アイノテ世界樹日記：あとがき  
—

149

# アイノテ世界樹日記―ごあいさつ

まず、この作品の主旨について説明します。

この作品は、たぶん2007年から2008年ごろ……？ にかけて、世界樹の迷宮のプレイをキャラクターの日記にして作品としたら面白いんじゃないかなー、と思って書いたものです。その後、世界樹4まで似たようなものを作っています。

アイノテというのは主人公のソードマンの名前です。

この時期、僕の中ではプチ縛りプレイが流行しており、そのためこの作品の基になったプレイでも、いくつかの制限を設けております。このときの縛りは

「雷鳴と共に現れる者戦を除いてメディックの参戦不可」

「30レベルになって引退⇒再構築するまでアルケミストの術禁止」

「第五階層までサジタリウスの矢禁止」

この程度でしたかね。

まあ、世界樹自体、三周目くらいはプレイでして、いまから考えると鼻で笑ってしまふような低レベルな縛りですが、大目に見ていただけだと幸いです。

(ちなみに世界樹初代だと、単騎プレイでは第二階層でケルヌンノスにどうにもならな

なくなって詰んだ記憶があるんですが、あれ工夫次第ではどうにかなるんですかね。二人パーティなら、レン&ツスクルをソードマン&バードで打倒するところまではやった記憶があります)

以下、作品の内容についての注記。

第一に、「プレイ内容に即した日記にする」というのが徹底されております。なので、「今日はいきなり魔物にのされて即撤退」とだけ書いてあつてなにも物語が進まない日がありますが、それは「迷宮行つたらいきなり全滅しかけて即撤退宿屋した」というプレイ内容とリンクしてるとお考えください。

第二に、「三周目のプレイなのを反映している」ということがあります。結果として、一周目と二周目のパーティがサブキャラクターとして出てきます。一応、わかりにくいように書いたつもりですが……キャラクターが多いような気がします。ご容赦ください。

以上です。

古い作品ですが、久々に読み返してみたところ、文章は荒いし読みやすくもないけれども、世界樹の迷宮への愛にだけは溢れた作品だったので、多少読みやすく改稿した上で、投稿することにしました。よろしければお楽しみいただけると幸いです。

おまけ：主人公達パーティの名前とクラス

1) アイノテ

クラス：ソードマン   アラインメント：Law—Neutral   性別：男   年齢：1

8

使用武器：剣   初期戦闘スタイル：唯一のまともな火力

備考：自己評価が低くひねくれているが誠実

2) ショロロ

クラス：アルケミスト   アラインメント：Chaos—Good   性別：女   年齢：1

3

使用武器：杖   初期戦闘スタイル：アイテム係

備考：無駄に楽天家で意外と情に厚い

3) カチドキ

クラス：ジャーナリスト   アラインメント：Chaos—Neutral   性別：女

年齢：19

使用武器：弓   初期戦闘スタイル：一応補助はする

備考：バードなのにジャーナリストとか言い張る無駄なこだわり持ち

4) イナー

クラス：レンジャー アラインメント：Neutral—Neutral 性別：女  
年齢：21

使用武器：弓 初期戦闘スタイル：お荷物

備考：外見だけは歴戦の勇者のように見えるが実際にはひたすら臆病

5) コルネオリ

クラス：パラディン アラインメント：Law—Good 性別：男 年齢：16

使用武器：盾 初期戦闘スタイル：ゴリ押し

備考：突撃嗜好でわりと無茶をする



# 第一階層：デビュー、試行錯誤、そして勝利

・笛鼠の月、11日

故郷の田舎村から旅をして5日目。ようやくエトリアに到着した。

今日からこの俺、アイノテもとうとう冒険者。輝かしい冒険への道が待っている。まずはどこかでギルドに入ろうと思ったのだが、目につく募集はみんなメディック。あ、これはレンジャー。これはアルケミスト……俺はソードマンだっつーの！

途方に暮れていたところ、金鹿の酒場の女主人がいいことを聞かせてくれた。どうも、最近話題のロックエッジというエースギルドの人員が膨れあがり過ぎたため、人員整理として株分けしたものの、こっちは人数が少なすぎて困っているらしい。ブラボー！速攻で紹介してもらった。

どうやら新ギルドの名前はホイスビーというらしい。現在集まっているメンバーはパラディン、アルケミスト、レンジャー、バード。なんてこつたい、見事に前衛攻撃職が抜けてやがる。よし、ここは一丁俺の腕を見せてやろうじゃねーか！

・笛鼠の月、12日

即、後悔した。

ぶっちゃけ、どんなギルドだって使える奴を放出するわけねーよな……リストラ組の悲哀が漂ってやがる。まともなのは俺だけじゃねえか。

頭を整理。とりあえずギルドのメンバーを見回してみよう。

パラ Dein、コルネオリ。こいつはそこまで悪くねえ。血の気が多くてテメエホントにパラ Dein かと聞いたくなるが、気骨はあるしやる気にも溢れてる。現時点ではほんこつだけど、鍛えればどうとでもなるだろう。

アルケミス、シヨロロ。ガキのくせに小生意気な理屈を振りかざす、いけすかねえ奴だ。特に初級の冒険者にとってはでかい敵には毒つてのがセオリーなんだが、こいつは毒なんて見栄えがしないし邪道だとか言つて覚えやしねえ。じゃあなに覚えてるんだつて、あん？ TP が高い？ 樹海の知識が豊富？ テメエちよつとその履歴書のスキル表欄見せてみる……つてオイ！ マジで術マスターいなんも持つてねえじゃねえか！ 泣かすぞガキ！

レンジャー、イナー。モグラ3匹が出て来ただけでいきなり泣き出した時にはマジでどうしようかと思つた。腕は悪くねえんだが……弓による支援は期待できねえつてことか。金になる薬草とかを見分ける知識だけはガチですげえ。けどいま欲しいのはそれじゃねえ。

バード、カチドキ。ジャーナリスト気取りの大馬鹿野郎で、ろくに歌も歌えねえくせに馴れ馴れしい。ていうか使えねえ。一応弓は撃てるみたいなんだが俺がバードに期待してるのはそっちじゃねえ。

以上。つうか早速樹海で戦闘したが、コルネオリ以外戦力にならねえじゃねえか。くそ。

・ 笛鼠の月、13日

これといって戦果もなくボロボロになって撤退。

まあ、泣き虫なのを除けばイナアの姉御は悪くねえ。問題は残りだ。

・ 笛鼠の月、14日

剣が刃こぼれするほど堅い虫と遭遇。おいアルケミスト、炎……そうだった。撃てねえんだよなあ。こんちくしょうめ。

死にそうになりながらなんとか撤退。これだからガキは。

・ 笛鼠の月、15日

1階で休憩中に変な色の蝶と遭遇、なんとか撃退。

こえーな。ちょっと油断していると樹海はすぐこれだ。アレに勝てたのはまぐれと思うが、全員無事でよかった。次からはああいう場所で休まないようにしよう。

で、同じく1階で、見分けにくい獣道発見。いろいろ見つかる伐採所との連絡通路が出来たので、これで当面の資金繰りはなんとかなりそうだ。

・笛鼠の月、16日

安定収入を得て気が大きくなったせいか、コルネオリの勧めで2階へ。

即、ウサギ共が大挙して襲撃。のされちまった。ガツテム。

どうも俺がのびてる間、カチドキの野郎が踏ん張って倒したらしい。帰ってこれたのはシリカ商店で売っていた不思議な糸のおかげだとしても、よくがんばってくれたものだ。少しだけ、あいつについては見直してやらんでもない。でも歌を歌え。それが先だ。

・笛鼠の月、17日

なんだよあのデカブツ……

びびっちゃまった。後で情報収集をしたところ、狂える角鹿、とか呼ばれているらしい。

2階の主みたいな奴で、ぶっっちゃけ勝てる気がしねえ。

が、コルネオりに言わせると、前のギルドのマスターであるメディック、アシタの棍棒にかかれれば、あの程度の獣なんかは一撃らしい。すげえな。つうかそれホントにメディックなのか？

・笛鼠の月、18日

3階に到達。

そして俺は、自分がいかに甘かったのか思い知った。

本当にマジで、カマキリ超こええ。勘弁してくれ。コルネオリ、アシタさん自慢はいからさっさと逃げる。つうか逃げコース間違つてんじやねええええ！ なんとか逃げたところにダンゴムシみたいなケダモノに襲われて全滅。しかけたところを、通りすがりの強いブシドーとカースメイカーに助けて頂いた。シヨロロ曰く、ボクがレンさん呼んできたからみんな助かったんだからね、とのこと。おまえそういうことを胸張って自慢するくらいなら、その前に術を身につける。マジで。頼むから。

で、その二人組、レンとツスクルから、4階と5階には頻繁に狼の大群が湧くので未熟なうちは近づくなと釘を刺された。こえー。絶対近寄らないことにしよう……おいシヨロロ、なにテメエ勝手に執政院から4階の地図とか取り寄せてやがる。ただじゃねえんだぞ。つたく。

・笛鼠の月、19日

変な夢見ちまった。例の固いケダモノ、ボールアニマルに手こずっているうちにカマキリがやってきて、逃げようと思ったら退路がなかった夢。

……マジでやめてくれないかな。心臓に悪い。そんなこと言ってたら今日も野牛に襲われ、ほうぼうの体で逃げ出した。最近、こういうのが多くないかオイ。

・笛鼠の月、20日

か……勝った！ 野牛に勝った！

マジ信じらんねえ。最後の一撃、俺超かつこいい！ とか思った。アドレナリン出まくり。これが……冒険……

はい。実は打撃源のかなりの部分は期待の新武器、ショートボウによるものです。最近イナー姉さんとカチドキに頭が上がらねえ。前衛の誇りはどこに。

・笛鼠の月、21日

調子に乗って鹿に挑んで勝てなかった。

堅いなあの鹿。ありやショートソードじゃ無理かな……どこぞのアルケミスト殿が

毒使つてくれりやあな。楽勝なのによ。と聞こえよがしに言ってるのにシヨロクの奴は聞こえないふり。くそ。

・笛鼠の月、22日

金がNeeeeeeeeeee!

困った。メデイカを確保したら、もう宿に泊まる金額がねえ。仕方ないので、宿泊まっけて起きて伐採行つて帰つてシリカ商店で売り払つてメデイカ確保してから出発。くそ、本気で追いつめられてるな。なんだこの自転車操業。

……いやまあ、正直1階で木こりのまねごとだけしてりや十分儲けは出るわけで、無理して下に潜る理由はあんまりないんだが。そう言つたらシヨロクが見下したように笑つたのですねえムカついた。くそ、意地でももつと儲かる場所に行つて、豪邸立ててやる。ナメるなよ!

・笛鼠の月、23日

樹海で500エン発見。た、助かった……と思つた直後、鹿に襲われそうになつて泣きながら逃げた。不思議な糸に超感謝。そして100エンの出費。ガツテム。

で、諦めきれずに再出発し、3階で狼と初遭遇。つつても戦つたのは俺たちじゃなく

て、いつぞやのカースメイカーのお嬢ちゃんだった。ツスクルとか言うらしい。それにしては呪言一撃で相手を殺すってのはとんでもねえな。ツスクル曰く「……ペイントレード。簡単」

とのことだけど、アレたぶん食らったらうちのパーティ全滅してる。

・笛鼠の月、24日

狼を初撃退。つ、つええ……

あとちよつと遅れてたら、血の臭いを嗅ぎつけた他の狼が到着してえらいことになってた。つくづく攻撃力不足が悔やまれる……なあ、シヨロロさんよ、テメエに言ってるんだぜ？

今日、金鹿の酒場で火の術式使える奴を呼んでこいって依頼があった。いま金欠なんでなんとかこなそうとしたものの、シヨロロじやどうしようもないんで無理言つて友人のコツクを紹介して報酬を分け合うことに。つうか友人はただのコツクなんだが火の術式1レベル。シヨロロ、テメエより使えるぞこいつ。

・笛鼠の月、25日

狼、追加して5つ撃退。コツをつかんできた。



で、浮かれて調子に乗ったシヨロロが、執政院からまーた勝手に5階の地図を借りてきやがった。しかも狼どものボス、スノードリフトをこらしめてこいという執政院からのミツシヨンまで受けてきちまった。

……えーと、切れていいですか。テメエ俺たちがそんなことできるレベルか！と言ったら、シヨロロの奴、計算上は近いうちに倒せるようになるから大丈夫、と得意げに返しやがった。おまえが戦うんじゃねーんだぞコラ！

・ 笛鼠の月、26日

狼、目につく限り全撃破。これでひとまず4階は安全か、と気を緩めて5階へ足を伸ばし、暴れ野牛にのされて気絶。な、情けねえ……

ぶつちやけ、以前はのびたコルネオリをひきずって帰ることが多かったのだが、ここ最近では立場が逆になってやがる。さすがパラディン、堅いな。

で、この状況で狼のボスをどうやって倒せと。無茶言うな。まずは頻繁に道を突進してくる野牛をどうにかしねえと話にならねえぞこれ。

・ 笛鼠の月、27日

迷宮で誰かの落とし物か、見慣れない剣を見つける。シヨロロの鑑定の結果、ボアス

ピアノソード？ とか呼ばれているタイプの剣だとか。使ってみたが、確かに悪くない。けど野牛退治にはちと力不足だ。どうしたもんかな……

・笛鼠の月、28日

目についた鹿をのしてみたらえらくでかい牙が丸ごと手に入った。シヨロロ曰く

「あ、これたぶん弓の素材になるよ」

とのことだったのでシリカ商店に行くと、すつつつつげえ感激された。最近はレアものだったらしい。お礼に安価で獣の大弓とかいうごつつい弓を2つ分、仕立ててくれた。すげえありがたい。これのおかげで野牛を攻撃前に打ち倒すことができるようになったはず。よし、スノードリフトに手が届くぞ！

・天牛の月、1日

油断して野牛にのされました。不覚。

・天牛の月、2日

昨日の油断を悔い、今度はもうやられないように覚悟して出陣。

スノードリフトまでたどり着いたが、慎重に行くべきだとカチドキが主張していった

ん撤退。悔しいが奴の言うとおりで。あの圧力の敵に、いま敵うとはどうてい思えない……

で、帰って戦利品を売り払ったところで、シリカ商店で売り出し中の格安新商品に気がついた。……ボアスピアソード？ マジで？

コルネオリが購入。飛躍的に攻撃力が伸びた。これなら……行ける、か？

・天牛の月、3日

大決戦を制した理由は、地の利を得たことだった。

迷宮の狭い箇所におびき寄せ、防御中のコルネオリが攻撃を一身に受けて耐久。耐えて耐えて耐えてる間にシヨロロが抜け目なく俺に近寄り

「はいアイノテ、ファイアオイルだよ」

テメエ今日は気が利くじゃねえか。気合いのダブルアタック！ ということで勝利。近くのスノーウルフどもをまったく寄せ付けず、傷ついたのはコルネオリの盾だけだった。

で、いかげん5階まで降りるのも長いし、ショートカットが欲しいなーと思っていたら、たまたま出会ったレンが樹海磁軸とかいう便利なモンを紹介してくれた。いきなり6階までワープできる優れものだ。ある程度力がある者にしか使用を許されていな

いそうだが、スノードリフトを討伐できるおまえらならば問題ないだろうと。よっしや、これでさらに儲かる場所を探せるぞ！

## 第二階層：探索、栄光、そして挫折

・天牛の月、4日

6階から先、一層深くなった森林は、通称第二階層と呼ばれているらしい。

今日からそこを探索だ気張るぞーと言って宿を出たところ、広場で変なガキ発見。コルネオリの知り合いらしい、カチノへとかいう陰気なカースメーカーの小僧は、俺たちを見るなりこう言った。

「今日……6階行くと、死ぬよ？」

こ、こええ。足がブルっちまった。それでも新階層に行きたいと駄々こねるシヨロ口をむりやり引きずって1階へ。こちらも、酒場の噂によれば、最近新しい通り道が見つかつたらしい。探索する余地はあるだろう。

で、行ってみたら超強い獣が暴れてやがる。それでもがんばって探索しようとしたのだが、途中で挫折。ぶっちゃけ、こいつら第二階層の敵じゃねえのか。なんでこんなところに……新人がうっかり入り込んだら、死ぬぞ？

・天牛の月、5日

1階の新通路の探索、終了。らしい。

らしい、というのは、最後俺は野良ナマケモノにのされて意識がなかったからだ。どうやら泣きながら力チドキが俺たちの身体引きずって逃げ出したらしい。……案外力あるよなあいつ。なんでバードなんかやってんだ。いや、ジャーナリストだっけ？

・天牛の月、6日

6階、初探索。

獣、ものすごく強いなー。どうしようもなくして逃げ回りながら、それでもなんとか、いろんな金になる素材などを見つけることができた。でもナマケモノ怖いよナマケモノ。助けてー。

・天牛の月、7日

今日は朝からコルネオリがおおはしやぎ。なんでも、新しい必殺技をひらめいたから実戦で使ってみよう！ とか。どんな技だよと聞いたら、シールドスマイトと言って盾を正面に構えて突撃して盾でぶん殴る……それ、技なのか？ と聞きたかったが、あまりにコルネオリが嬉しそうなので言うに言えなかつた。

で、とりあえずナマケモノ相手にぶちかましてみたところ、衝撃に巨体がぐらりと傾

いた。おお、すげえ！　と思った次の瞬間ナマケモノから強烈な一撃。コルネオリ気絶。……ダメじゃん。要は地力がないとなにやっただって一緒ですよという、大変ためにならない教訓でした。

・天牛の月、8日

伝説のギルド、グレイロツジのメンバーが、後進のためと称して稽古会を開いた。

意気揚々と行くコルネオリに連れられて、俺も嫌々ながらも参加。といっても、俺は楽しく冒険して樹海で稼げればそれでいいので、稽古とか興味がないのです。なのでロッドテイルとかいう重戦車みたいな戦士にコルネオリがタコにされてる間、俺はマハという名前の、発音の少しおかしな子とずっと喋っていた。

どうやら彼女、ずいぶん遠くの国から来たらしいのだが、意外なことにイナー姉さんをよく知っていた。以前は二人でよく、魔物に見つかからず勝手にそーっと移動する方法とか研究していたらしい。自分もレンジャーになりたかったけど、トロかったので無理だったんだーと、楽しそうに彼女は言った。

と、そんな感じで雑談しているとところにロッドテイルから怒号。喋ってる暇があったら貴様らも戦えと言われ、仕方なくマハと一緒に模擬剣を構える。可愛い子だから傷つけないなーと思いつつ手加減気味に仕掛けたら片手の指で止められ、あ、ヤバ、と

思つて身を引いたところにあごを盾でかるーく撫でられた。そこから先の記憶がない。  
あのレベルの戦士とタメ口利いてたのか俺は……迂闊だった。人は外見によらない。  
教訓としてもらつておこう。

・天牛の月、9日

扉を開けたら熊が3匹もいたときの驚きと叫びたら。

ていうか、なんなんだよあの熊ども。マジで尋常じゃない。スノードリフトなんて目じゃねえだろ、あれ。第二階層半端ねえな……とか言いつつ、最近シリカ商店に並んだ新型メデイカを惜しみなく使えば一応探索をできるようになってきたうちのパーティは、案外適応力が高いのかもしれない。

ま、しばらくは採集して金稼ぎつつ、メデイカ連打の日々だな。

・天牛の月、10日

7階に到達。案外早かったな。

……まあ、到達した早々、いばらの敷き詰められた地面にびびって撤退したんだけど。  
帰り道、シヨロロがきよるきよる茂みを見ているのでなんだと思つたら、

「ほらアイノテ、ここに獣道があるよ」



マジかよ。通ったら入り口近くの茂みに出た。つうか執政院の地図に載ってねえぞこれ。なにやっつてんだあいつら。

・天牛の月、11日

サソリに袋小路に追いつめられて撤退。

マジで泣きそう。なんだあのバケモノの山。第一階層に帰りたい。

とか思っていたら、なんか変な水晶のカケラをシヨロ口が拾っていた。奴が言うには、浅い階層にあった封印された扉の鍵らしい。暇があつたら回ってみようよ、だと。まあ、暇があればな。

そして7階の探索はほぼ完了。そろそろ資金繰りが厳しくなってきたが、執政院が欲しがっている飛竜の卵とやらは8階にあるって噂だ。アレ取ってくればしばらくはしのげるよつ、とはしやぐシヨロ口を見ていると……やばい、不安しか出てこない。なにかの刷り込みか？

・天牛の月、12日

8階には飲むと体力を回復できる不思議な泉があると聞いたんだが、行ってみたら枯れていた。

その場にいたレンの言によると、こういうことはよくあるそうで。上の階に魔物とかが住み着いて、巣を作った結果として水がストップしてしまうところなるらしい。回復したいなら自分で魔物を倒してこい、だつてさ。うがー。

仕方ないので飛竜の卵へゴー。飛竜、でかすぎて姿見ただけで心臓発作で死ぬかと思つたが、がんばつて逃げ回つた結果、なんとか卵を手に入れ即逃げ。執政院に報告した。しかしそれはいいとして、8階には下層へ進む階段が見当たらない。どうしてだろう？ と思つて、ちようど酒場にいたマハに質問してみた。

「あれ、飛竜の巣の奥に隠し通路あるんだけど、知らないの？」

……マジすか。つーか俺たち、あんなおつかないところに何度も足を運ばなきやあかんですか。勘弁してくれ。

・天牛の月、13日

いい加減、ちよつと自分らは弛み過ぎなんじゃないかと思ひ、嫌がる奴らをむりやり連れて熊に特攻。

……俺だけ気絶つてどういうことつすか。

いや、まあ、コルネオリの奴の防御が堅いつてのは知つてたが。ここまでとは。

このあたりで金が尽きたので採集活動再開ー。即座に3000エンほど稼いでふた

たび探索へ。こういうとき、イナー姉さんの採集スキルはマジで頼りになる。

・天牛の月、14日

7階で巣を作つて泉を堰き止めていた魔物を撃破。

固定したねぐらがあるわけだし覚悟して行つたが、それにしてもえらく強かつた。仕方なく虎の子のファイアオイルを使つちまつた……アルケミストが（ry  
最近アイツ開き直つてねえか。むかつく。

・天牛の月、15日

熊、2体目を撃破。らしい。

らしいというのは、また俺だけのびてたから。つうか、一撃で倒れるんすけど。どうしろと。

コルネオリがガードしてくれりゃいいんだが、あいつの盾突撃以外にろくな攻撃手段がない現状ではそれも無理だし……困つた。打つ手がない。

・天牛の月、16日

ここ数日第二階層をうろついて、俺たちの致命的な欠陥が浮かび上がってきた。要す

るに、危険な花びらによる眠り攻撃をかわす手段がないんだな。

盾突撃じゃどうしても後攻になっちまうし、それ以外だと攻撃が来るまでに2匹しか倒せないの、たくさん出てきたときにはもうどうしようもない。全員眠ったところに火食い鳥の火炎弾とか来た日には、これはもう火葬ですわ。いや、かろうじて生きてたんだけど、あのときは「詰み」という言葉を本気で意識したな……

くそ。どうすつかな。

・天牛の月、17日

なんかスノードリフトと愉快な仲間たちが復活したらしい。

執政院はそれで朝から大忙し。俺たちも当然のごとく狩り出されたんだが、結果から言えば俺たち出る必要あったのか？　みたいな感じだった。

というのは、コルネオリの古巣のロックエツジが討伐隊に参戦したからだ。つうかあのアシタとかいうメディック、マジで棍棒死ね死ねラツシュだけでスノードリフト狩りやがった。最後、スノードリフトがガチ泣きしてた気がするのを見間違いか。コルネオリは憧れのアシタさん大活躍に目を輝かせてたが、俺はぽかーんと馬鹿みたいに口を開けて突っ立つてることしかできなかつた。

・天牛の月、18日

樹海サソリの持つ、真鉄のけっこう分厚い殻があるんだが、これをシリカ商店に持っていったところ大好評。最近真鉄がちょうど尽きていたらしい。

もう少し持つてくれば真鉄製のプレスプレートを作つてやるとのことだが、それより俺としては新型の剣、レイテルパラッシュが店に並ぶようになってきたのが嬉しい。これで俺の攻撃の威力もそれなりに増えるつてもんだ。すげえ助かる。

コルネオリも防御陣形覚えたつつたことだし、これでようやく樹海のさらなる奥地への探索が可能になるつてわけだ。

……金があればな。くそ、金欠が激しいぜ。

・天牛の月、19日

嘘みたいに戦いがうまくいくようになった。

やっぱり、防御陣形+レイテルパラッシュ二本が画期的だったらしい。すげえつええ！　と思つて調子に乗つて熊に突撃して俺だけ撃砕。な、なんで……

防御力不足、深刻です。

それはともかく、以前からギルドのアドバイザーとして登録所に居座つてる眼帯ヤローがへんな提案をしてきた。8階で5日間の武者修行？　無茶言うなよ……と思つ

たが、餌として出されたシリカ商店で発売されはじめたばかりのニューモデルの服にシヨロ口が過剰に反応。カチドキを口説き落としたせいで、決行することになっちまった。ガツテム。

つうかその話をマハにしたら、けらけら笑いながら

「でもさ、回復の泉の近くじゃほとんどの生き物はおとなくなるから、その辺で5日キャンプすれば楽勝だよ？」

とか言われた。いやまあ善意で言ってくれたところ悪いが、その辺を見抜けてのがこの試練の主眼だったんじゃ……いいけどよ。感謝もしてるけど。

つーことで、今は夜。これから逝ってきます。

・天牛の月、25日

生きて帰ってきたぞー！

いやまあ楽勝だったけど。最近俺が使うようになった新技、トルネードがマジで強いということに気がついたら、急に楽になった。それでも最初は殊勝にもいろいろ鍛えながら回っていたのだが、収集品が持って帰れないくらい膨れあがったので慌てて中断。あとは飯を狩るとき以外、ずっと泉のそばにいた。

いちばんはしゃいでいたのは例によってシヨロ口で、林間学校みたいだとか言つて大

喜びしてた。で、放っておいたらいきなり黙り込んだのでその辺の木を指差してションベンならそこらへんでしろと言ったらすげえ怒られた。そういやあいつ、女だったんだな……やせつぼちで、背が高く、男口調で、ガキだからつい忘れちまう。つうか名前もあんまりこのあたりの地方の女らしくはないよな。と聞いてみたら、なんと父親と同じ名前らしい。マジかよ。アルケミストどもはクレイジーだな、とカチドキに言ったら「ん、でも大シヨロロはわりと良識人だよ?」

と返された。なんでも前に取材に行ったら、すごく丁寧に扱ってもらったらしい。……それだけで良識人という判断もどうかと思うが。というかこいつ本当にジャーナリスト活動とかしてたのか。

そしてキャンプ。うちのパーティはひ弱なのでここまで長く籠もつたことはなかったが、やっぱりキャンプともなるといろいろわかるものである。特に、イナ―女史の料理が絶品ということが判明。思うんだけど、このひとは冒険者にしとくのがもつたいなくないか。当番制だったので他の奴の飯も食ったが、コルネオリのは食えたもんじやなかった。後はフツ―。意外にもシヨロロが食えるモンを作ってきたことには驚いたが、俺とどっこい程度じゃまだだね。

しかしやつぱり、5日も潜ると普段見ないものが見えるねー。樹海で生きるコツが多少見えたような気がする。

そして帰ってきたらシリカ商店で新発売が目白押し。カチドキは新しいリユートに見入っていたみたいだが……悪い、とりあえずロングボウとヒーターシールド優先な。

・天牛の月、26日

調子に乗って7階の大サソリを倒してみた。案外イケるもんだな……が、さすがにこんなのを繰り返していると普通に金が尽きる。仕方ないので明日は採集生活だな。

・天牛の月、27日

すげえ。今のイナー姉さんが本気を出すと1日で4000エンも儲かるのな。

あまりに儲けたので、カチドキに新しいリユートを大盤振る舞い。すげえ喜んでた。こいつもジャーナリストとか名乗ってるが根つこの部分でバードなんだよな……

そして9階を漁る。だいぶ耐久力ついてきたな、うちも。

・天牛の月、28日

うっかり飛竜とコンタクト。やったね♪

いやマジでシャレになつてねえつての。ありや人間に勝てるもんじゃねえわ。一応、コルネオリが一撃で意識トバされつつ身体で食いついて時間を稼いでくれたおかげで、



たまたま近くにいたロックエッジの救援が間に合ったけど。

しかしロックエッジ、ホントとんでもねえな。ダークハンターのハラヘルスって姉ちゃんからはイナー姉さんと同じ気配を感じたが、あの腕は本物だわ。以前会った力チノへと一緒にびしびしと縛って相手の動きを封じ、その間に棍棒と矢と斧が雨のように降り注ぐ。あつさり狩つちまった。信じられねえ。あいつら人間か？

そして10階突入。すげえ、俺たちまるで一流の冒険者みてえ！ とひやつほうしつ突撃し、ドアを開けたらゾウが4体もいて死ぬかと思つた。マジ勘弁。

・王虎の月、1日

密林の中、レンと会つた。

こいつもすげえよな。どこのギルドにも入つてないみたいなのに、腕だけで樹海の中をひとりかふたりでうろうろしてやがる。

で、レンが言うには、この先は行くべきではないらしい。なんでも、以前からこの辺ではケルヌノスとかいうヤバイ獣が大暴れしているので、行くと君たちのレベルじゃ間違ひなく死ぬぞ、ということ。

上等だ、行ってやろーじゃん！ と言えるほど俺も無謀じゃありません。シヨロロとかやる気満々だったけど。まさか勝てる気か？

・王虎の月、2日

今日起こつたことを冷静に書き留めるのは、ちと難しい。とりあえず書かなきゃいけないことは山ほどあるんだが……

時系列順に行こう。まず、いつものようにシヨロロが無茶なことを言い出した。これはまあいい。奴はそういう性格だつてのはもう重々知っている。だがそれを誰一人止めなかつたのは、たぶんここ最近の冒険の成功で浮かれていて、天狗になつてたんだらう。

結果、俺たちは密林の王者、ケルヌンノスと戦うことになつた。

勝てたさ。ああ、勝てた。俺の右腕と引き替えにな。

全治2週間。思つたよりは浅かつたらしい。怪我したのは俺だけじゃねえ。無茶やつたシヨロロのほうも、同じくらい寝込まないとダメだそうだ。

せっかくギルドの経営も軌道に乗つてきたトコだったのにな……めげるわ。とりあえずコルネオリ達は浅い階層を回つて当座の資金を稼ぐことに決めたらしい。あーあ、ひでえもんだ。

シヨロロは、これまでにない大失敗のせいで部屋に籠もつて出て来ねえ。ま、若いうちにはそんなこともあるさ。せいぜい悩め。ついでにこれを機にもうちつと使えるよう

にならねーかな。

……ま、なんだ。俺の腕が上がるようになるまでには、な。

## 第三階層（1）：休養、修練、そして死闘

・王虎の月、4日

起きたら一日が経過していた。

どうも一昨日、日記を書いてから1日以上起きなかつたらしい。ずいぶん疲れが貯まつてたんだなあ。

コルネオリ達は1階の探索をしつつ、臨時で誰かを雇うそうさ。もう募集はしているそうなので、後は来るのを待つだけらしいんだが……うちの知名度で、まともなのが集まるかあ？ ちよつと不安だ。

・王虎の月、5日

速攻で2人集まった。早。

しかし、こいつら使い物になるのか？ 経歴だけは立派なんだけどなー。

ダークハンター、ナリアンテスは黎明期のグレイロツジに参加していた古強者。だそうだが、普通に古いだけじゃねえのかこいつ。動き見てもなんかあんまりキレがねえし、聞けば一時期引退してたそうなんだが、まだ戦えるのか？ 不安だ。

ブシドー、ネイホウはレンの紹介でロックエッジに入ったという……その、経歴だけ見れば超強そうなんだが。ぶっちゃけ、しゃべり方がひどい。「いやーソレガシ案外強いでござるよニンニン」という初対面の挨拶を見て不安にならないほうがおかしいだろう。まず案外とか自分で言うなよ。そもそもロックエッジの二軍っていう立場は出会ったばかりのゴルネオリと同じなんだが、ゴルネオリと違ってこいつには気合いが足りてないように見える。レンに会えたら彼女の評価を聞いてみたいもんだが……ああ、不安だ。

・王虎の月、6日

見舞いにきてくれたマハ相手に雑談。

ナリアンテスについては、その身分は正しいと保証された。引退してからどうなったかはマハにもわからないが、少なくとも全盛期は、あのロッドテイルも認める優秀な鞭使いだっただけ。ちなみに引退した頃の腕は

「うーん……そのころあたしたちも第三階層だったから、いまのアイノテたちよりちよつと上くらいだったと思うよ」

だそうな。

それにしても気が滅入る。俺の腕は相変わらずさっぱり上がらない。大丈夫なのか

これ。

・王虎の月、7日

ケルヌンノスに頭を刈り取られる夢で目が覚めた。ここんところ、こういうのばつくだ。寝覚め悪いつたらありやしねえ。

それはともかく。実力を心配していたナリアンテス&ネイホウだが、どうやら杞憂だったらしい。奴ら金持ちだから装備はいいとはいえ、たつた二人でスノードリフト狩つてきやがった。すげえな……ぼやぼやしてると、俺もクビになっちゃうな。

・王虎の月、8日

新パーティの探索、初日。

カチドキに話を聞いたところ、11階にはずいぶんと蟻が多いらしい。大亀はこのあたりの名物で有名らしいんだが、蟻のほうは聞いてなかったので驚いたんだとか。

本来なら執政院が動いてもいいんじゃないかってくらいのことなんだが、あいにく執政院は執政院で10階の異常事態にかかりきりだ。なんでも、全冒険者通達とかいう聞いたことないものを出しやがったくらいに異常事態らしい。そんなにヤバいのかよ……あー、動きてえなあ。

・王虎の月、9日

うわ、うちのギルド、10階の難題をあつさり解決しちまいやがったよ……

マジ強いなああの助つ人二人。いや二人だけじゃねえ。カチドキもイナー姉さんも、コルネオリもすげえ強くなってる。たぶん、あのケルヌンノスに勝った自信つてのもあるんだろう。一気に強くなった感じだ。

取り残されてるのは俺だけだ。くそ。

・王虎の月、10日

眼帯のおっさんが、また無茶なことやってきやがった。

熊を一人で狩ってこい、だと。無茶言うなつての。誰が引き受けるんだ、と思つたらコルネオリが傷だらけで泣きながら帰ってきた。うええマジで勝つたのかよ。信じられ……なくもないか。コルネオリの堅さで防固めてシールドで殴つてたら熊でも勝てないだろ。なんだかんだ言つてこいつもロッドテイルの弟子だからな。

そして俺の腕は今日も上がらない。まずいんじゃないのかこれ。

・王虎の月、11日

コルネオリの憧れのひとであるアシタから、それ精神的な理由でしょ、と言われた。

元はコルネオリの様子を見に来ただけらしいのだが、喋ってみてあまりのフアイターっぷりに相手がメディックだということ忘れて話を振ってしまったのが運の尽き。本職らしく診察のまねごとみたいなのをした後、

「いや、たしかに怪我してるけどさー、ぴくりとも上がらないって傷じゃないよこれ。腕が上がらないなら、べつの理由があるんじゃないの？」

「べつの理由？」

「そ。よーするにキミ、ブルつちやつてもう樹海に行きたくないんじゃないの？ で、腕が上がらないのを理由にトンズラしようとしてるんでしょ。自分のギルドを妙に持ち上げるのも引退して文句言われないための伏線ね。やーいチキン野郎。なっさけないねーキミそれでも男？」

……言いたい放題言いやがるな、あの女。

パペールという、アシタお付きの線の細いレンジャーがめつちやペこペこ俺に謝っていたが、俺はあいまいにしか返すことができなかった。アシタの診断は口こそ悪かったが、完全に当を得ているような気がしたからだ。

ああ。認めるよ。俺は樹海が怖い。

元から、そこまで才能溢れたソードマンだとは自分でも思っていなかったし、樹海に



行つて大物に出会うたびに逃げたくなる自分と必死で戦つていた。

それでも、田舎から出てきて冒険者として大成するつて夢のため、どうかこうにかやりくりしてきたわけだが、ケルヌノス戦で思い知つてしまった。ああ、この辺が限界か。と。

まだできないことはないと思う。でも、俺が強くなる限度はこの程度、というのが、なんとなく心に思い描けてしまった。そして、痛みとともに身体の一部が動かなくなる経験も、恐怖と共に刻み込まれた。そりゃ無意識に拒否反応が出てもおかしくないだろう。

……潮時、かねえ。そろそろ。

・王虎の月、12日

コルネオリからシヨロ口に打診が来た。近いうちに出れないか、との話。

なんでも火力が決定的に不足しているらしい。蟻の大群に囲まれてとんでもねー大苦戦をしたとかで、鍛えれば戦力になるアルケミストが欲しい、とのこと。

……ま、俺には関係のねー話か。

・王虎の月、13日

シヨロ口と大喧嘩しちまった。

……いや、それもたぶん、俺が全面的に悪い類の。

打診が来てからなにかごそごそやってたシヨロ口だったが、今日起こしに行ったら俺が一瞬わからなかったらしい。

で、不審に思っただけ聞いてみたら、どうも一時的に記憶障害を起こしかねない薬を飲んだようだった。そのおかげで集中力が激烈に増し、大氷嵐の術式を覚えることに成功したが、いくつか障害が残った。すぐ戻ると思うけど、いま必要なのは即戦力だからね、とシヨロ口は言ったが、俺は我慢の限界だった。

怒鳴りつけた。なんでそんな無茶してまで樹海に行くんだ、そんなにして実力が落ちた状態で行っても満足に活躍なんかできるわけねーだろ、と。

最初はただ疎んでいた相手も、だんだん理不尽なことを言われていると感じてきたらしい。ふざけるなど言い合いになって——取っ組み合いの喧嘩になるのに、あまり時間は要らなかった。

いくら俺の腕が動かないって、アルケミストのガキに遅れを取るほどナマっちゃいねえ。シヨロ口もすぐにそれを理解したが、それでも絶対、あいつは退こうとしなかった。絶対に倒せない俺に向かって、感情だけで、何度痛い目に逢っても向かってきた。勝てないとわかっていても、決して退かなかった。

……今の俺はアイツ以下かよ。畜生。

・王虎の月、14日

土下座して謝った。

シヨロロはなんだかんだ言つてガキだから、昨日の喧嘩を自分も悪いところがあると  
思い込もうとしていたつぽい。けど、それでお互い悪いと言つて水に流すほど、卑怯に  
はなりたくなかった。アイツを前に、自分がそこまで嫌な大人になるのは許せなかつた  
し、許したくない。

それで、いろんな話をした。昔のことや、これからのこと。

アイツは、親を尊敬していたし、親が自分みたいになれと言つて付けた自分の名前を  
誇りに思つていた。だから親を真似てアルケミストになつたけれど、なつてから自分が  
アルケミストに向いていないって気づいたらしい。火を出す仕組みはわかつて、火よ  
りも樹海の収集物や生物たちのほうに大きく心を動かされた。最初はアイツなりに立  
派にやろうと思つていたが、やがて疲れてしまったらしい。それで、使えないアルケミ  
ストを気取つてごまかしていた。

でも、今はそういうことを言つていられる事態じゃない。樹海は急速に、虫たちに食  
い潰されつつあるらしい。どこかにいる女王種を早く倒さないと、下手をすれば街まで

蟻であふれかえりかねない。

だから、戦うのだ。大切な樹海を守るために、自分の死力を尽くさないと。この際、疲れたとか言つてられないからさ、と言つてアイツは笑つた。

……すげーな。俺なんか目じゃねえ。アイツは、たぶんこの街でもとびきり樹海が好きで、樹海のことを本気で考えてるんだらう。

俺はただ、一発当てるつもりでエトリアにやつてきた山師。

アイツは、エトリア生まれで、エトリアの樹海を本気で愛する探索者。

……最初から勝負になつてねえな。こりゃ。

それでも。

できれば、コイツの力になつてやりたいなあ、と思えたのは、少し救いだつたかもしれない。

・王虎の月、15日

グレイロツジの道場に通うことにした。

ホントは見学だけのつもりだったんだが、見ているうちに剣が振りたくなつてきた。で、模造刀に手をかけた瞬間、マハにどやされた。腕が動かないときに変な練習をしたら変な癖がつくからやめろ、と。

……いや、正論だけだよ。くそ。

・王虎の月、16日

道場、2日目。

シヨロロは今日から樹海の探索に出るらしい。つってもまだ第三階層に適用できるほど回復してないので、イナー姉さんとカチドキ連れて第二階層の奥に出かけていった。

……それでも十分すげえけどな。

俺は日がな1日、道場で稽古を見てた。つうか初めて知ったが、サシでやるとロットテイルより強いのが、マハって。どうりで俺とじゃ勝負にならないわけだよ。

・王虎の月、17日

道場、3日目。

ワテナとかいうブシドーのお嬢ちゃんを初めて見た。

すげえ。ネイホウなんて目じゃねえじゃん。やっぱありやダメなのか。いやまあ、レオンと比べりゃ一発だけどさ。

マハは、グレイロツジ最強の戦士はどうだった？ なんて聞いてきた。いやもう、感

想もない。素振りしかしてないのに、その密度に怖気が走る。あの域には絶対辿り着けないだろうな、俺は。

とか言いつつ密かな憧れを抱いてしまいうわけだが。ああ、剣振りてえなあ。

・王虎の月、18日

こつそり裏のほうで剣振ってた、案の定見つかった。

……それも、ロッドテイルに。

よりによってやばいのに見つかったら、案の定げんこつでぶつとばされた。怪我人が無茶してどうする、と、立派な戦士ですら竦み上がる大声で罵倒された。

それで、スイツチが入っちゃった。

うるせえ俺よりずっと年下のガキが死ぬ気で無茶やつてるのに俺がこんなところで立ち止まってられるか、と、食ってかかった。相手は俺なんか勝てるはずもないバケモノ重戦車だが、アイツだって俺相手に退かなかったんだ。俺も、ここで退いたらダメになると思っていたから、必死だった。

相手は、……驚いたことに、殴ってこなかった。

代わりに、息を思い切り吸い込み、近所中に響き渡る大声で大喝した。

「馬鹿か貴様は！」

そこで流されてどうする！ その種の無茶を窘め、諫め、フォローしていくのも年長者の責務であろうが！

そんな気分だからいつまで経っても樹海に戻れんのだ、このうつけものがあつ！」

——目が覚めた。

自分に足りないもの、それが完全に理解できたように思った。すげえなおっさん、俺のことなんてほとんど知らないくせに、俺より先にそれに気づいて喝破しやがった。

思わず礼を言うと、ロッドテイルは顔を真っ赤にして「ふ、ふんっ！」とか言いながら去っていった。……あー、あれはあれでわかりやすいタイプだわ。今までただの嫌な親父と思っていたが、認識を改めよう。

・王虎の月、19日

ロックエッジ最強の戦士、チ・フルルーと初顔合わせ。

グレイロツジからロックエッジに流れたという黄金の経歴を持つ彼女は、雰囲気だけならその辺の素人と変わらない。が、マハと雑談しながら片手で大斧ぶん回すのを見ると、やっぱり超人の類だと思う。あれなら人間も片手でぶん回せるだろうな。たぶん。

で、その彼女に現状を率直に告げて相談してみたところ、

「んー、わたしは斧使いですから剣のことはよく知りませんけど。

ギルドにアルケミストさんがいらっしやるなら、蟻は氷に弱いので……そうですね、水の追撃を仕掛ける類の剣技を覚えられてはどうでしょう？」

と、すげえ的確なアドバイスをもらった。感謝。

樹海のほうは、相変わらず。シヨロロもだいたい元の勘を取り戻してきつつあるようだ。

……じゃあ、俺もがんばらないと。

・王虎の月、20日

嘘みたいに腕が軽くなってきた。

大事を取って訓練は明日からってことにしたが、ここまで早いとは。やっぱり精神的なアレかね……あーやだやだ。自分のことながら、うじうじしているのは見てて嫌気が差す。

そしてナリアンテスが引退。今のシヨロロなら、自分がんばるまでもないだろうというこころらしい。顔は悪いがけっこうな使い手だったな。機会を見て、俺からも礼を言っておこう。

・王虎の月、21日



すげえぞ俺。怪我する前より調子いいんじゃないのかこれ。

とか思つてたら案の定マハに注意された。無理しすぎ、と。いやーまあはしゃいでるのは自覚してます。でも自分とは思えないほど剣の振りが早い。こりや復帰もだいぶ早くできそうだ。

・王虎の月、22日

調子に乗つてマハと立ち稽古。

相変わらず相手にならなかつたが、瞬殺だけはされなくなつた。終わつたあとで、成長したねーとマハに頭を撫でられた。……いや、それは外見的にどうなのか。

・王虎の月、23日

コルネオリから、明日までに復帰できないか、と打診が来た。

ネイホウが、蟻との戦いで無茶をしすぎたらしい。いやーセツシャあの量は勘弁して欲しいでござるよニンニンとへらへら笑いながら言つていたが、他のメンバーから聞くと本気でシャレにならない量が押し寄せて来たそうだ。奮闘しなければ全滅の危機だったそうだ。あいつもよくがんばつてくれたなあ……俺も、がんばらないとな。

・王虎の月、24日

状況は、思ったより深刻だった。

フロントラインは第二階層の磁軸手前。そこから先は蟻が埋め尽くして、もう目も当てられない。執政院はふたたび全冒険者通達を出して12階にいと目ざれている女王蟻を狩ろうとしているが、グレイロツジやロックエツジ、レン&ツスクルまで動いているのに、未だに女王の巢を発見できていないらしい。

マジで蟻だらけ。勘弁して欲しい。俺けっこう虫苦手なんだけどなーと言ったらシヨロロに笑われた。むかつく。

・王虎の月、25日

12階でアシタ達と遭遇。

女王を捜している、と言ったらアシタは眉をしかめ、

「キミたちじゃ無理じゃないのー？」

あれ戦つてるとどんどん蟻が寄ってくるから、大火力ないときついよー？ なに、

そつちのアルケミストはグレイロツジの毒使いみたいなバケモノなわけ？ ハイキ

ラーアント何発で倒せる？ 1発？ それとも2発？ え、4発だって？ 論外ね。出

直してきたら？」

と挑発ぎみに言い放った。アレもホント容赦ねえ性格だな……シヨロロは終始、すつげえ不機嫌そうだった。まああれだけ言われりやな、とフォローのつもりで言ううと、そうだよあの女、たいして面識もないくせにアイノテに馴れ馴れしくして何様のつもりだつ、とか息巻いてた。いや、怒るのはそっちなのか？

・王虎の月、26日

遭遇は、偶然と言つてよかつた。

執政院に渡された地図には書かれていなかった謎の空洞にいた、それまで見たことのない体躯の大蟻。シヨロロは見た瞬間に相手の正体を看破し——当然、迷うことなく突撃。困った奴だが、フォローする準備はできてる。大いにやれ！

幸い、遭遇戦だったのは相手にとつても同じだった。まわりの蟻たちが集まってきて、俺たちを迎撃する準備が整うまでには、コルネオリの指示によつて俺たちは隊形を整えている。だが、相手は予想外に堅かつた。シヨロロが呼び出した氷の塊を相手にぶつけながら、ダメだ、出力が足りないよ、と悲鳴を上げる。

……つたく、そんな程度で悲鳴を上げるなら突撃なんてするなつーの。

属性の選択は悪くねえ。火力不足は未熟が原因だが、それはもうどうしようもねえ。だから、そいつはこつちでフォローしてやるさ。

俺は剣に仕込んだ仕掛けを起動し、叫んだ。

——チエイス・フリーズ！

周囲の蟻は、俺の攻撃込みで2発で倒せる。

それはありがたい事実だったが、他の火力がコルネオリのシールドスマイトしかないというのはいかにもきつい。それでも、最後は時間との勝負で、こちらの根気（と、ネクター）が尽きる前に相手の体力がギリギリ尽きてくれた。

正真正銘、ケルヌンノスなんか目じやない大物の撃破。勝った後、しばらく俺たちは呆然としていた。うわ、勝っちゃった、とか言ったのが最初に突撃したお馬鹿さんだったことは、この際目をつむることにしよう。

ああもう、ともかく疲れた。達成感とかどうでもよくてとりあえず惰眠をむさぼりたい。なのに、酒が入ったコルネオリはなかなか離してくれなくて、結局相当夜が更けてから寝床に入ることになっちまった。あいつも、酒飲むとグチつぼくなる癖さえなきやいい奴なんだがな……

## 第三階層（2）：探索、搜索、そして空振り

・王虎の月、27日

なにも言わずに全員休息日。コルネオリは昼になつても降りてこねえ。まあ、あれだけのペースで酒あおればそうなるわ。つうか、そのペースを同じように保っていたカチドキがピンピンしてるのが逆に不思議だ。あんなの飲んだうちに入らないっすよ旦那ーとか言ってるし。ちなみにイナアの姉さんは早々に酔いつぶれ、早々に寝たせいで逆に今日の寝覚めは最高だったそう。シヨロロ？ ガキは酒なんて飲むもんじゃねえ。

で、ぼーっとしてたらすつつつげえ不機嫌そうな顔をしたアシタがやってきた。よくやってくれたわね、キミたちは街の英雄よ……つて、棒読みで言うなよ怖いから。そんなに狙つてた相手を狩られたのが悔しいのか。と思わず言ってしまうと、アシタはめっちゃ怖い目でこつちを見た後、

「まあいいわ。これからキミたちは後輩じゃなくてライバル決定だから。」

——ケケケ、ロククエツジを敵に回したこと、後悔するがいいわ」  
とか不気味に笑つて去つていった。

後でパベルがフォローに来たが、アレも苦勞するタチだな。ったく。……お互い様か。うちの鉄砲玉は終始ザマアミ口って顔してたし。

・王虎の月、28日

樹海探索に戻って1日目。

依頼を受けて石ころを探してたら珍しいことに金色の毛皮の野牛と遭遇。ちよつと警戒しつつ突撃してみたら防御陣形を指示しようとしたコルネオリが一撃でトバされて泣きそうになった。その後力を貯めて突撃してこれれそうになって、またそのあたりの通路が突撃を避けられるような場所じゃなかったんで本気で死ぬかと思つたが、例の大氷風の術式↓チェイスフリーズのコンボが思いの外効いたおかげでかろうじて勝てた。マジで死ぬかと思つたぜ……

で、帰ってマハにその話をしたら、

「え、それ凄いなー。たぶん23階くらいは獣だよ」

とか言われた。マジか。ていうか、裏を返せば23階ってあのレベルの獣がゴロゴロしてるんですか。行きたくなえ……と言つたら、

「まー、でも24階のアーマーピーストよりは断然弱いんだけどねー。執政院の記録じゃ、危険は少ないとか寝言書いてあるんだけど、なにを勘違いしてんだろーね」

と返された。訂正。行けるかそんな魔窟。

・素兎の月、1日

13階に到達。

で、ザコ獣どもと戦っているとふと凶悪な気配を感じることが多いんだが、いつたいナニが隠れてるんだよこの階層。勘弁してくれ……この階の主なんかと出会ったら、いまの俺たちには勝てる気がしないんだっつーの。

・素兎の月、2日

今日、同じように凶悪な気配を感じつつ戦闘を終え、ふと背後を見ると木の影にこそつと隠れようとした蟹の姿。

うわなんだあれ、と思った時には、シヨロロがいつものように突撃していた。ええい迷惑な。後で説教な……って今はそれどころじゃねえ。攻撃開始！

で、弱かった。拍子抜けするほど。妙にカチドキばつか狙われていたのでカチドキだけ泣いていたが、後はまったく被害もなく勝利。こそこそ隠れたり女ばつか狙ったり、妙に人間的な蟹だ……まさか中に人が？

それで、調子に乗って主っばいワニに突撃したらぞろぞろワニ共が集まってきて死ぬ

かと思つた。あとで執政院の記録見たらあつさりそういう習性だと書いてあつた。今度から調べて挑もう。

・素兎の月、3日

以前からカチドキが、3階に山賊王エドウとやらの宝が眠つてゐるといふ噂を仕入れてきていた。

いやまあ、ぶつちやけガセだと思えないわけだが。酒の席でそう言つたら、奴はムキになつちまつた。わたしのネタが信じられないのかテムエーとか言つて。酔つてない顔してしつかり酔つてやがるなこいつ。

で、なだめるためにとりあえずテキトーに調査だけして帰ろうと思つてた。ぶつちやけカマキリはトラウマになつてるので、あんまり3階には寄りつきたくなかつたんだが、まあそれはそれ。

そして、俺たちは迂闊にも、準備なしにソイツのねぐらに踏み込んだ。

女王蟻のときにも感じた、あの死に至る戦慄が駆け抜ける。相手は——まさに、その規模の奴だつた。

見た目は石の像。だが生き物のように動き、とんでもねー勢いで攻撃三連。バックガードと防御陣形を駆使しても、シヨロロに飛んできた日には運次第でぶつ倒れる。火



力はそのシヨロ口の大氷嵐の術式と、俺の追撃のみ。単純な打撃はまったく効果なしときた。

まあ、相性はよかった。相手は自動再生機能の持ち主だったが、あいにくこつちにはその手の能力を封じることにかけてはプロがいる。因縁の3階、ボールアニマル相手にカチドキが習得した沈静なる奇想曲が、はつきりと明暗を分けた。

ま、カチドキ的には、山賊王の宝がガセだったせいで落ち込みしまったみたいだが。奴のおかげで生き延びることができたのも事実なんだし、そう悪いこともないんじゃないかねえのかな。たぶん。一応お尋ね者の怪獣だったらしく、賞金ももらえたし。

・素兎の月、4日

で、めげるといふ言葉を知らないのがカチドキというヤツである。ぶつちやけちよつとはへこんでおけて感じてだが、どうにかならんのかこいつ。

今度は儲け話だよと言って持ってきたのは、13階で伐採できるものをありつたけ持つてこいというトンでもねーネタ。無茶言うなよ、そのあたりつい最近足を運ぶようになったばかりじゃねーか……と思っていたら、イナーの姉さん曰く。

「その程度なら私一人でもできるけど。アイノテが嫌なら一人で行つてこようか？」  
すげー。このひとも戦闘中以外はホント肝座ってるよな……いや戦闘中は泣きなが

らメデイカ撃つひとになってるけど。どうやったたらそこまで豹変できるんだか。

まあ、一人で行かせるわけにも行かないので、ちまちまみんなで繰り出すことに。幸い、13階で休憩ポイントを見つけておいたので、なんとかなるだろ、たぶん。

・素兎の月、5日

今日一日かかってようやく依頼達成。あー疲れた。

ちなみに、今日見つけたあの13階の水場の奥、あれは人が踏み込んだ形跡がなかった。カチドキはウハウハだー大もうけだーと騒いでいたが……そういう事態に遭遇するたびに、あーでもやっぱダメなんだろうなーと思ってしまう俺は、ひよつとしたら貧乏性なのか？

・素兎の月、6日

甘い。ダメとかそういうレベルじゃなかった。

意気揚々と探索に出かけた俺たちを待っていたのは、すつげえ勝ち誇った顔をしたアシタと愉快な仲間たちだった。

「なにキミたち、いまごろこんなところに来たのー？　こんなところあたしたちが昨日の夜に探索し尽くしちゃったよープププ。」

あーお宝いっぱいめで気持ちいいなー気分いいからコイツ恵んでやるので以後あたしに足向けて寝るの禁止ね。じゃあバイバーイ。ケケケのケ」

とか言つて、ぽーいとひとつだけ宝物をシヨロロに放り投げて去つていった。

即座に水面に投げ捨てようとしたシヨロロを一応制止して宝物を吟味。お、これ、昔手に入れた水晶と似た形してやがる。これなら、いままで開いてなかつたいろんな扉も開くんじやないか……？

ふと横を見ると、シヨロロが涙ぐんでいた。いやおまえ、泣くほど悔しいか？ と聞いたらぶん殴られた。なんでだよ……まーしかし、じつを言うと俺はあんまり悔しくないんだよなー。いっつも疲れた顔してるロックエツジのレンジャーに妙な親近感を覚えてるからかなー。そんなことを言ったらまたぶん殴られた。自覚はあるんだな……

そしてカチドキはもうこれ以上ないくらい落ち込んでいる。まあ、こんなんでもどうせ、明日には誰より血圧高い状態で迷宮行こうと言ってくるんだらう。懲りないやつである。

・素兎の月、7日

もうこうなりや下の階層を目指すしかないってんで、15階への階段を探そうとカチドキは言う。そりやおまえ、見つかったら苦労はしねえよ。まあ、探しているんだが

な。

マハあたりに聞けば一発で教えてくれるんだろうが、あいにくグレイロツジはここしばらくぶりに本格活動を再開したらしく、捕まらない。まあ、それ以前に困ったときにすぐ人脈に頼るのも冒険者らしくねえしな。

ちなみにコルネオリは、アシタさんに聞いてくるつ、と無邪気に言つてシヨロ口に殴られた。まだ機嫌悪いのかよ……

・素兎の月、8日

迷宮、15階到達。

……した途端、すごいものを見た。

グレイロツジが苦戦している。とんでもねえ大きさの竜——後で聞いたところ、氷嵐の支配者とか言うらしいそいつが、一軍フルメンバーのグレイロツジと格闘していた。

ロッドテイルが防御陣形を、マハがフリーズガードを宣言する。ムズピギーが沈静なる奇想曲で相手のガードを打ち消しまくり、そしてその隙についてオコナーとワテナが炎をたたき込む。

理想的に近い連携を見せながら、しかし竜には一向に効いていないように見えた。ぶつちやけ、あれは人間に倒せるレベルの竜なのか？ とか、そんな呑気なことを考え

ている余裕は、どうやらそのときの俺たちにはなさそうだった。騒動を聞きつけて、このあたり一帯の主、空飛ぶエイことコロトラングルが攻めてきたのだ!

マハに言われるまでもなく、背後の守りは俺たちがやるしかねえ。圧倒的な死の気配にももう慣れた。やるしかねえなら、やっちまえ!

強大な力に何度も屈しそうになったが、かろうじてメデイカが底を突く前に相手の体力が底を突いた。都合14撃。大爆炎+チエイスファイアをただひたすら連打し、相手のガードを、ここはグレイロツジと同様に、カチドキが打ち崩す。コルネオリは防御に専念。イナー姉さんは回復に専念。だんだん、戦い方が決まってきた気がする。

まあ、よく保った。一度シヨロ口が前に出すぎてトバされたが、そのくらいは立て直せる程度の力もついてきた。なんとか相手を下して後ろを見ると、ちょうど傷ついた氷竜が湖の奥へと逃げていくところだった。助かった……

帰るつもりだったのだが、グレイロツジが16階の樹海磁軸まで案内してくれると言うので甘えることにした。ホント、こいつらは人格者だよなあ……もうひとつのエースギルドとは大違いだ。

## 第四階層（1）：栄光、悲劇、そして敗北

・素兎の月、9日

帰ったら英雄になってました。

いやマジで。なんか気がついてたら、グレイロツジと共闘して氷嵐の支配者を撃退したということになってた。無理だからそれ！と慌てて訂正したが、事情通どもにはコロトラングルを単独で倒したことのほうも知れ渡っていたらしい。なんでも15階はあのエイを刺激しないようにそーっと進みましようってのが定番になっていて、アレを倒したギルドなんて今まで数えるほどしかないそう。そういうのは早く教えてくれよ……しかもアシタがことあるごとにライバル視しているとまで暴露され、ロツクエツジのライバルギルドとしてエトリアにおける我がギルド、ホイスビーの株がいきなりストツプ高に。

……勘弁してくれないかなー。あんなの二度とやりたくないし、俺たち結局は凡人の集まりなんだけどなー。こらシヨロロ、ちよつと褒められたくらいでいい気になってんじやねえ。

・素兎の月、10日

いい気になった結果、全滅しかけました。マル。

いつものごとく発端はカチドキ。なんでも執政院からの依頼で、飛竜が最近うるさいから原因を調べてきてくれ——って、あの飛竜かよ！　って感じだったんだが、まあシヨロ口は思いつきり乗り気だったし、倒せて話でもないから一応行ってみるかーと8階に行ったらいきなり襲われた。タスケテ。

そんでもって、がんばって善戦したんだが、コロトラングル戦後のアイテム欠乏期でぶつちやけ回復が追いつかねえ。イナー姉さんが倒れ、カチドキが倒れ、新型ネクタル使ってコルネオリを復活させたタイミングで俺が狩られた。後は記憶にないのだが、聞いたところによるとシヨロ口がコルネオリに先読みでネクタルを投げつけるという神の一手が功を奏し、ギリギリ二人だけで撃退したらしい。飛竜は泣きながら飛び去っていったとか。

そして俺たちの名声はさらに上がる。バカ言うなつての。あんなまぐれ勝利まで実績にカウントされてたまるか。

・素兎の月、11日

16階以降、第四階層は通称枯レ森と言う。ぶつちやけ水がない。最初に見たときは

マジびびった。そのくせ、獣は普通に多いときてやがる。どつかに隠れた水場でもあるのかねえ？

で、樹海磁軸を出たところで、へんな女と出くわした。コロトラングルを傷つけたのは貴様らか、とか聞いてきやがる。もしやこいつが噂の亜人間、モリビトって奴か？と思つて尋ねると、質問に質問で返すとは何事かと激怒された。

モリビトというのは、グレイロツジが見つけた樹海の奥に住む亜人種だつて話だ。いろいろあつて一時、エトリアの街とは戦争状態にまであつたらしいが、グレイロツジがいろいろやつた結果、なんとか収まつたとか。だが未だに人間に怨恨を抱えているモリビトも多く、油断してはいけない——そんな話を、噂で聞いていた。

で、たぶんそのモリビトだろうそいつは、あのエイを傷つけられたことにいたくお怒りらしい。樹海の守護者たるありがたい御方になつてことを、とか言われてもなあ。あれ明らかに正当防衛だろ。と言つたらさらに激怒された。誠意がないらしい。

もう面倒になつたので適当にあしらおうとしたところ、そこに通りかかつたのがロツクエツジのザ・軽薄ことバードのチクタク。お、かわいこちゃんはつけーんねえねえ名前なんて言うの？ とか空気も読まず聞き出したのでモリビトのモリコだと適当に紹介したらぶん殴られた。私はそんな変な名前じゃないつ、だそうだ。……そんなに嫌だつたのか、モリコ。



で、結局うやむやになって物別れに終わった。あいつ、なにしに来たんだ？

・素兎の月、12日

気を抜いたら一気に、俺とコルネオリが持つてかれた。

で、久々にケフト施薬院を訪れたわけだが、なぜかやたら高かった。院長いわく、いまままで割引していたわけで、一流の冒険者であるおまえ達にはもう割引なんていらんだろ、とのこと。

そうか……そんな風に言われるようになってしまったんだなあ。いまいち実績がない気がするからよくわからんが、そういうことらしい。

・素兎の月、13日

風雲急を告げる、とはこのことだ。今日、ロックエッジが壊滅した。

壊滅、というのは文字通り。かろうじて動けたパペールの機転によつてなんとか撤退だけはしてこれたらしいが、大打撃を受けた。パペールとチ・フルルはそれでも立つて動けるが、ハラヘルスとカチノへはしばらく病院生活だそうだ。

で……ああ。自分でも思い出すのが嫌だったんだが、アシタはひどいもんだった。前線ですつと一人で時間を稼ぎ続けた結果そうならしい。怪我というより、壊れたと

言う方が正しいような惨状。一命はそれでも取り留めたが、動けるようになるには早くても3ヶ月。それも元の動きができるようになるかはわからないらしい。

シヨロロには、面会を許さなかった。刺激が強すぎると思ったからだ。それでもいろいろきつかったらしく、いま部屋に籠もって泣いている。まあ、あの歳のガキにはシビアだろうさ、今回のことは。正直、俺だってシヨックだ。

それにしても、意識を取り戻した第一声がヤローテメーぶつ殺してやるつーのはさすがアシタ。ぶつちやけアイツがこのままくたばるなんて想像できないが……それは樂觀が過ぎるか。

・素兎の月、14日

樹海の奥の奥。第六階層と言われる場所がある。

ロックエツジが壊滅状態になったのは、そこだった。ハラヘルス曰く、オバケに襲われた、とのこと。なんのことだか俺はさっぱりだったが、一緒に来ていたマハが即座に返した。それはヴィズルのことですか、と。ハラヘルスはうなずいた。

その時点で俺はなんだかわからなかったが、マハはこれ以上言えないという。——どーもきなくさい。その場の判断ですぐそこを後にした俺は、カチドキを捕まえてヤバキーワード、ヴィズルについて調査するように頼んだ。餅は餅屋だ。

で、3時間で調べてきた結果。ヴィズルは前の執政院の長で、モリビト戦争の引き金を引いた黒幕であるが、彼がなにを考えていたのかは誰にもいまいちわからないらしい。わかつているのは、彼がグレイロツジを抹殺しようとして振り返りにあったこと、それからグレイロツジとロツクエツジがこここのところ第六階層を探索していたのは、その辺の調査をするためということだ。

どうしてそこまで早く調べられたのか聞いてみると

「え、ロツドテイルさんに直接聞いただけだよ？」

……ペラペラしゃべっていいのか、あの親父。たぶんバカだから簡単に誘導尋問とかに引っかかったんだろうな。もしくはあいつ、実は若いバードの女の子に弱いのか。そういうあのギルドのムズピギーもそのタイプだったな。

で、さらに調べるためには樹海のもつと奥を調べるのがいちばん手つとり早そうなのだが、困ったことに執政院からやばい通達が出た。16階の樹海磁軸の使用禁止、及び18階以降への立ち入り禁止ときやがった。なんでも、グレイロツジが今回の件について調査して報告するまで、深い階層は危険だから出入りを全面禁止するそうだ。……いきなり足を封じられたな。

・素兎の月、15日

シヨロ口が暴発した。

アシタの敵討ちだとか言つて、いや待て執政院の通達があつてだなと説明することちの言も聞かずに飛び出した。バカ、一人でなににする気だ阿呆。慌てて仲間を集めて後を追ひ、たぶん最寄りであろう1階の樹海磁軸にやってきたらあの野郎、そこで待つてやがる。俺を見てにたーと笑つて、

「来ると思つた。さ、行こうか」

……ま、負けた。なんかすげえ敗北感。つーか最近俺はあいつの尻に敷かれてませんか。とつぶやいたらカチドキが驚いてリユートを取り落とした。……それは今更気づいたのかつて反応ですか。ガツテム。

まあ、実際は準備もしていなかつたことだから、1日待つて明日から出発することにしたわけだけど。それでも、シヨロ口の嬉しそうな笑顔を見ていると、つい、あー流されてるなーでもまあいいかという気になってしまう。ヤベエな。俺もロツドテイルのおっさんの悪口言えねえわ、こりや。

・素兎の月、16日

こつそり女王蟻が復活、部下を生み増やしつつ潜伏していたのに出くわしたのだが、もうまったく完膚無きまでになにひとつさせず勝利。だいぶ強くなつたんだなー俺た

ち。特にイナー姉さんの新必殺技、アザーズステップが超強い。あのひとも地味に進歩しつづけるひとだよな。ひとりじゃぜったい戦えないが集団戦で真価を發揮する。

で、17階に初めて到達。した途端に例のモリビトの女、通称モリコが待っていた。なにしに来たのかと思っていたら、なにしに来たんだおまえらと聞いてきた。下の階を目指していると言ったら顔をしかめて、いま行つてはダメだと言う。なぜ？ と聞いたから、どうも下の階から変な怪物が上がつてこようとしているので、危険だから行くべきじゃないと止められた。

なんだよ、心配してくれてるのか。と言ったら顔を真っ赤にして人間の心配なんか誰がするかつと一喝された。こいつもロッドテイルと同じクチか……おいシヨロロ、なんでおまえ不機嫌そうにしてるんだ？

ともかく、忠告はありがたく頂いた。注意しつつ下を目指すことにすると言ったらなんにもわかつてないな貴様！ と怒られた。いやまあ、モリコの気持ちはわかったからと言ったら、うわああんモリコつて言うなーと叫んでどっか行つちまった。……いい名前だと思うんだけどなあ。モリコ。なんかカチドキとイナー姉さんはおまえが悪いって顔してる。シヨロロは最初からおまえがなにもかも悪いって顔してる。コルネオリは終始なにも考えてない。なんか、俺たちのギルドにも変な役割分担ができちまったな。

そして体力が尽きて撤退。17階は規模の割に複雑な迷路だ。特に、片側からは容易に通れるがもう片側からはなかなか通れない木の通路が多すぎる。なんつーややこしい……

・素兎の月、17日

死ぬかと思った。

氷の剣士、レン。呪い師、ツスクル。最強の冒険者にして俺たちの共通の後援者であつた彼らが、突如として牙を剥いた。

場所は18階の水飲み場。さして大きな獣もおらず、平和な枯れ木の大平原の中に、いきなり鈴の鳴る音が響いた。

なんだろうと思つてそちらを見ると、そこにレンとツスクルがいた。いつものように——レンはいつも厳しい顔だし、ツスクルはいつも陰鬱だ——、いつもするように立つて、ただしレンは刀に手をかけていた。

ここぞなにをしているんだと聞くと、それはこちらの台詞だ、たしか全冒険者通達が出ていて18階は立ち入り禁止だったはずだが、と答えが返ってきた。そりやアンタも同じだろ、と言うと、レンは苦笑して、……そして、刀を抜いた。

なんでだ。なんでアンタたちと戦わなきゃならない。そう尋ねると、レンは涼しい顔

で答えた。なに、このまま地下に行つても君たちの実力では生きては帰れまい。ならばここで死んでも同じこと。さつきとくたばれ小僧。

悪夢みたいな戦闘が始まった。

戦う意志はあつたが、相手の剣はまるで見えなかつた。それでも経験から相手の剣筋を予測して一合、二合。三合めが来る直前に割り込もうとしたコルネオリが、一足で盾の内側まで踏み込まれ、当て身で吹っ飛ばされた。一撃。あのコルネオリが一撃でだ。冗談じゃねえと思つていたら俺のほうに剣が来て、アザーズステップで俺と入れ替わつたイナ―姉さんが峰で打たれてぶつ倒れた。急に歌が途絶えて後ろを見たら、ツスクルの手から伸びたツタがカチドキの喉にからまり、吊り上げて窒息させているところだつた。そうしてよそ見した俺は――次の瞬間、どこに攻撃を受けたかわからないほどの衝撃を受けて、吹っ飛ばされて地面に転がった。

シヨロ口は、最後までがたがた震えてなにもできなかつた。そのせいか、レンもツスクルも彼女には手を出さなかつた。

「弱い」

簡潔に、レンが言った。

「とても弱い。これから死の階層に挑まんとする冒険者がこの体たらくとはな。――笑わせてくれる」

うるせえよ。笑い顔なんて見せたことないくせに。

つぶやいたら、レンは修羅のような笑みを見せた。

「その、小さな脆い腕で、なお——下に赴く気か」

当たり前だ。俺は退かない。

「なぜだね。君たちはもう、十分に富と栄誉を手に入れている。実力に不相応とまでは言わないが……なあ。この辺でいいんじゃないのか、アイノテよ。もうそろそろ君たちはやめ時だ。そうは思わないか」

初めて。

レンの瞳が、本気で俺の瞳をのぞき込んだ。

ああ、そりやそうだ。俺はもう、ケルヌノス戦で思い知った自分の実力限界にとっくに達している。

最初に会ったとき、レンは俺には絶対に勝てないと思った。実力差がありすぎてその差は見えていなかったが、直感的にそう思ったんだ。いまなら断言できるが、その直感は正しかった。なまじ強くなった分、レベルの差がはつきり量れちまう。

——だがよ、レン。

悪いが退くつもりはねえ。俺はそれでよくても、後ろの奴がそれじゃ嫌だつてうるさいんでね。



レンはその答えを聞いて、ため息をついた。

「21階で待つ」

言つて、きびすを返す。

「モリビト達には知らせておこう。君たちはなんの遠慮もなく、いつでも21階で私に挑戦するがいい。

そして死ね」

……正直、それ以上は覚えてねえ。悲しそうなレンの瞳、それだけしか記憶に残っていない。

次に目が覚めたとき、俺はケフト施薬院のベッドの上で——そして、ベッドの側に、泣きながら俺の手をにぎっているシヨロロがいた。

渡された試練はたったひとつ。

レンと、ツスクル。21階に赴き、あの最上級の冒険者に打ち勝たなければならない。

## 第四階層（2）：試練、試練、そして試練

・素兎の月、18日

マハが、16階の樹海磁軸使っていいよ、と言ってきた。

……すっつげえ複雑な顔してたので聞いてみると、ねえ、なんかレンさん怒らせるよ  
うなことした？ と聞いてくる。あいつが手を回したのか……で、怒らせること？ 俺  
が知るか。相手に聞いてくれ。

で、21階で相手が待っていることを告げると「嘘!？」と驚かれた。なんでも、現在  
は24階あたりまで第六階層の敵がちらほら出没していて、なにかあると21階でも十  
分危ないんじゃないか、という。

さらに続けてマハは、

「アイノテ達がいまレンさんたちと戦ったら、まず勝てないと思うよ」  
と言う。そりゃそうだ。なにしろ手も足も出なかつた。

一応なんでそう思うか聞いてみたら、

「だってわたしたち戦ったことあるもん。あのふたりと。21階で。

わたしたちだけじゃなくて、たぶんロックエッジもね」

……参った。やつぱりグレイロツジはすげえ強いんだな。そう言うのと、マハは複雑な表情で首を横に振った。

「わたしたちは勝ったけど、レンさんは満足してくれなかった。

たぶん、いまでも彼女はわたしたちに負けたと思っていないうんじやないかな。たぶんね」

シヨロロは部屋から出てこねえ。そりやそうか……なんだかんだ言つて、人間と戦つたのなんて初めてだしな。誰だつて怖いさ。俺もな。

——それでも。

あいつがいつか出てきたら、絶対に潜るつて言い出すと信じている。

だから、できる限りの準備はしておかないと。

・素兎の月、19日

グレイロツジの道場で体当たりにレン&ツスクルの攻略法を聞いてみたら、どうも奴らは4人がかりでツスクルを抑えている間にワテナがレンと一騎打ちで倒したらしい。……それはもうぶつちやけ人間の所行じやねえな。

一応、当のワテナに攻略法を聞いてみると、

「え、踏み袈裟連打しただけだけだ。

だってあのひと刀を鞘に収めようとするとするんだもん。それって居合使いで首討ち屋で即死させマツシャーっつーことじゃん？　じゃあ構えなんて使う前に手数で押すしかないじゃん」

参った。こりや参考にならない。

で。なんとか俺たちがレン&ツスキルと戦える方法はないかとみんなで知恵を絞った結果、なぜかその場にいたナリアンテスが

「あら、じゃあワテナちゃん並にアナタが強くなればいいのよ。手始めに例の試練とかどう？」

とか抜かしやがった。無理言うなっつーの……て、例の試練？　え、13階の出歯亀蟹を一人で倒せって？　誰ができるんだそんなの——えーと現在成功者3名、レンとワテナとアシタですか。全部超人じゃねえかよ！　と言ったらロッドテイルにぶん殴られた。根性が足りん！　だいたいその3人が試練挑戦当時から超人だったとも思っているのか！　と抜かしやがる。横でマハがぼそつと、でもアシタさんはあのころから無敵だったよね……とつぶやいていたがロッドテイルは無視。さらに試練を受けることが確定しちまった。ガツテム。生きて帰れるのか俺。

・素兎の月、20日

せめて攻略法をと思つてマハに聞いたらロッドテイルから口止めされました。

さらに執政院が急に樹海データを出し渋るようになりました。すげえ。政治パワー全開で俺の卑怯活動を封じる気かよ。カチドキに頼む、という手も考えたが、考え直した。なんとなく、奴も面白がつてロッドテイル側に回りそうな気がしたからだ。

とはいえ、あの蟹はたしかものすごく殻が固かった記憶がある。シヨロロとのコンビネーションに頼れないつつーのは痛い。俺の戦法、全部あいつとのコンビで考えてるからな。

……そういう意味では。あの戦闘は負けて当然だった。シヨロロが戦おうとしないときの俺は、ぶつちやけ第二階層から進歩していない。身に付いたのはコンビネーションのやり方だけだ。

つまり俺は一人で戦うタイプのソードマンじゃないわけで——オイ、心底意味なくないかこの訓練。

気を取り直して考える。まだ超人じゃなかった頃のレン、あいつはいつたい、どうやってこの訓練を乗り越え——抜刀氷雪。考えるまでもねえ。

では超人……なりたてだった頃のアシタ。あいつはいつたい、どうやってこの訓練を——医術防御棍棒棍棒棍棒死ねやオラ。はい簡単ですね。ハハハ。

最後に、ワテナを考える。超人じゃなかった頃のワテナは——あれ？

マジでどうやって対応したんだアイツ。ぶつちやけ踏み袈裟至上主義の奴にとって卸し焰なんて遠い存在だったと思うんだが……と考えて、気づく。オイル。

速攻シリカ商店に走った——が、時すでに遅し。ごめんねーさつきロッドテイルさんが大量買い付けしていっちゃったんで売り切れなんだーやーグレイロツジって金持ちなんだねーでもアレすぐ使うのかな倉庫に入れてたら劣化しちゃうんだだけど。ガツテム遅かった。こうなりや、いちかばちかのトルネード連打で押すしかないか……いやそれともスタンスマッシュをチ・フルルーに教えてもらうか……でもそんなに時間ないし……あーもう、あの親父は俺を生かして帰す気があるのか!?

・素兎の月、21日

ぶつつけ本番と腹くくってギルドを出た直後、思いつき後ろから引つ張られてひつくりこけた。

引つ張った張本人は案の定、ずつと部屋から出てこなかった馬鹿者だった。テメエなにしやがんだシヨロ口、と言ったら、忘れ物だよ、と言って小さな瓶を渡してきた。——オイル。どこで買ったんだと聞いたら得意げに、ボクの職業を言っごらんアインノテと……手作りかよ。やべ、初めてこいつに心底感謝した。

いやもう、そうなったらぶつちやけ負ける気がしねえ。即座に挑戦し、回復アイテム

が尽きるギリギリ手前で勝利。いっぺんやばいところに攻撃が当たってヒヤヒヤしたが先読みが功を奏して死なずに済んだ。ラッキー！

・素兎の月、22日

よし次はうごめく毒樹だ、とか言われました。いい加減にしてくれ……

要は、神速で相手をたたきのめす攻撃力を身につける、ということらしい。俺がそんな早い成長速度を保てるかってーの。

で、相変わらず買い占め&嫌がらせモード全開のロッドテイルの目の前でシヨロロに、じゃ、ファイアオイル作ってくれな、と言ったらすごい罵倒された。ふふんなんとも言え。試練の条件にオイル禁止とか書いておかなかったテメエが悪い。

で、その日のうちに作ってもらったファイアオイルを使って速攻撃破。ぶっちゃけ、ダブルアタック使ったらオーバーキルだったな……蟹よりずっと弱いじゃねえか。

・素兎の月、23日

試練その3ー。

なんか白き姫とか自称しちゃう貴族の困ったちゃんがいつものようにデムパを受信して眠れないーとかいうことなんで助けてやれ。ってそれメディックが睡眠薬調合す

れば終わりじゃね？　と思ったが、そういえばグレイロッジってメイックいないんだな……というか、明らかに自分のトコに来たはずの依頼を横流ししているんだがいいのかこれ？　あと試練の意味はどこに。ぶっちゃけロッドテイル迷走してねえか？　と聞いたら目を逸らしやがった。凶星かよ。

で、アシタはあのぎまだしどうしたものかなーと思つたら、折つた腕を包帯で吊つてぶらぶらしているカチノへ発見。雑談の中でその話をしてみると

「昏睡の呪言……なら……効くかもね？　ふふ……」

だから怖いっておまえ。まあ善意で協力してくれるっつーから連れて行つてみたら、あんまり効かなかつたんだがなぜか超感謝された。ぶっちゃけ眠れないことそっちのけでカチノへにまとわりついてたが……デムパな上に少年愛嗜好かー。いい根性してるなお嬢ちゃん。

まあ報酬というか追い出し料みたいな感じでもらつたキタラはずいぶんいい物だったらしくカチドキはめちやくちや喜んでたけどさ……あれ、ほつといてよかつたのかねえ？

・素兎の月、24日

昨日日記書いたあとで酒場でネイホウとちびちびやってたら、デムパ姫がすつげえ勢



いで駆け込んできた。なんでも、滅茶苦茶怖い夢を見たのであれぜつたい正夢だからな  
んとかしろつて……なんとかしなきゃいけないのはおまえじゃね？ とか失礼なこと  
を思ったが、もしや昏睡の呪言がへんな作用をもたらしたんじゃないかと思ったのでカ  
チノへに聞いてみたら

「どつちかつていうと……縛りが効き過ぎた？ ふふ……昨日はすごかったから……」

……聞かなきゃよかった。なんて嫌なガキだ。

で、帰ろうと思ったところをカチノへに呼び止められて、

「僕も……正夢、だと思っようよ？」

なんでだ、と聞くと、

「だって今日、……来るよね？ 1階に。すごいのが」

来るよね、じゃねえよ。そういうことは早く言え！

でグレイロツジに報告しようとしたが、探索中つていう話だったので無理。俺たちが  
迎撃するしかないのかよ……勘弁してくれ。

そして撃退。す、すっげえ強かった……なんだあのバケモノ、と思つてあとでカチノ  
へに聞いたら、たぶん下の異変で追い出された第四、第五階層の獣たち、だそうだ。ど  
うりで強すぎると思つた。

ちなみに執政院からアウロスが報酬として出た。カチドキ大喜びだが、ぶつちやけこ

の試練ってヤツだけが得してないか。まあ、結果的にはいい訓練になった、とも言えるのかもしれないけど。まさかロッドテイルはこれを予測してこの話を……ないな。間違いない。

・素兎の月、25日

試練その4。7階あたりで女の子の声が聞こえる。定期的に聞こえるから迷子って可能性はあまり多くないが、放置しておくわけにもいかないから調査よろしく。……最近、本格的にグレイロツジの下請け機関化してないか俺たち。

で、カチドキにちと情報収集を頼んだ。だって7階なんて未熟な頃に調べまくった階層なのに、俺たち一度もそんな経験してねーんだもん。つーかみんなホントにそんな不思議現象にぶち当たってるのか？ マジで？

・素兎の月、26日

どうも11階から7階へ上がる階段があるらしい。

執政院には報告されてないらしく、どーも一部のギルドが見つけたものの、自分の漁る場所を確保するために黙っていたらしい。なんだよ非協力的な奴らだなーとか憤慨してるカチドキは、たぶんもう13階で起こったことを忘れてる。テメエもやろうとし

たことあるだろが、独占。

で、早速調査、早速挫折。なんだよあのイバラだけで覆い尽くされた場所は……と言いつつも、イナー姉さんの発案でいくつか木を切り倒して普段の7階からそちらへと出るショートカットを作っておいた。やっぱ頭いいな、あのひと。

・素兎の月、27日

華の女王、アルルーナ。

結論から言えば、俺たちが追っていた声の主は、そんな名前のブツだった。

イバラの道の奥の奥。声に誘い出されそうになった俺たちは、イナー姉さんがぼんと手を打ったことで我に返った。あのまま誘われてたら間違ひなく死んでたな。

で、ちと搦め手ではあるが、カチドキひとりがおびき出された振りをしてふらふらと行き、そちらに敵の注目を集めておいて、俺たちが背後から急襲した。よくもだまぐらかしやがったなこのバケモノめ、くたばれ——そんなことを、戦闘前には思っていた。思っていたさ。

ははは、マジでシャレになってねえ。一応植物だけに熱には弱いみたいだが、相手も熱、氷、雷を普通に操ってきやがる。どれをガードしたらいいのかわからないコルネオリはもうどうしようもないとばかりにバックガード連打、イナー姉さんがアザーズ

テップでカチドキにソーマ連打させ、危ないときにはシヨロロJrまで回復に参加させる。事前に山ほど用意したソーマはみるみるうちに減っていき、雷撃が邪魔でうまく術を使えないシヨロロに頼るわけにもいかず、俺はずっとトルネード連打していた。やがてハマオが尽きソーマが尽きアムリタも尽きて、俺とイナー姉さんの体力が限界を迎えて技が使えなくなつて、もうダメ元で本気を出したイナー姉さんの矢が相手の額を直撃して、——それで、決着が着いた。

教訓：イナー姉さんは神。

つうかどこのバケモノだよ……と思つていたら、いきなり後ろからモリコに声をかけられてマジでびびつた。モリコ曰く、こいつはずいぶん前に禁戒を犯してモリビトの集落を放逐された大犯罪者のなれの果てらしい。そういうのは頼むから自前で処理してくれと言つたら、処理しに来たら先を越されたんだつ、とすつげえ不機嫌そうに言われた。どうでもいいけど、こいつの機嫌がいいところを見たことがないな。

・素兎の月、28日

試練その5。

最近16階、もしくは17階で異様な環境の場所が発見された。それ自体は俺たちも知っていたし、相手が強くていい鍛錬場になるとマハに言われて何度か活用していたん

だが、ぶつちやけその場の主を狩ってこいと。しよ……正気ですか？

で、久々に街でパペールに会ったのでその話をしたら、えらく驚かれた上に止められた。アレは状態異常攻撃が激しいからアシタというかメディックなしじゃ無理。つかアルケミストの術にも強いので悪いこと言わんからシヨロ口を外してどつかその辺のメディック連れていけ。ハハハ、アンタそれ当のシヨロ口の前で言いますか。案の定ぶち切れたヤツは、即座にシリカ商店とケフト施薬院を回って自分専用の防具と大量のテリアカβを買い込んできやがった。さー行こうかアイノテ、まさか嫌とは言わないよね？ ……またこのパターンかよ。

で、突撃したが大量の熊やらワニやらに阻まれて撃退される。どこにいるんだよソイツは。

・虹竜の月、1日

昨日とおなじことをやり、やっぱり大量の竜に阻まれて撤退。くそ、勘弁してくれ。

・虹竜の月、2日

17階の魔物の名は、マンティコアと言うらしい。長い通路の奥の奥で待っていた奴は、俺たちを見ると尻尾で地面を叩いて挑発してみた。——上等。

で、シヨロロの新装備、デイノブレストが大活躍。ぶっちゃけアレなしじゃアイツは尻尾十毒で一撃で気絶しちまう。耐えさえすればアルルーナのとくと同様にあざーズステツプナソーマで先制回復可能なので、あとはシヨロロがテリアカβを連打。アルルーナよりずっと楽でした。あいつ足が遅いから、後攻アイテマーとしても使えるんだな……そりやそうか。第一、第二階層のシヨロロはアイテマー以外の何者でもなかったしな。

・虹竜の月、3日

試練その6。チ・フルルーがなくなった斧の代わりを求めているので、材料となる3階のゴーレムの腕をまるごと一本取ってこいって出来るかああ！

無理だと抗議したいところだが、ロッドテイル曰くもう引き受けて料金も受け取ったから、と言う。ははは、テメエその料金俺にもよこせ。と言ったら授業料だと返された。……だんだんムカついてきたぞ。

で、キャンセルだキャンセルと思ってハラヘルスの見舞いに来ていたチ・フルルーを捕まえて説明すると、ハラヘルスのほうが苦しそうに起きあがった。私が手伝う、つていやそれ無理だから！ と言ったのだが、ハラヘルスは

「現状、私はどうしても即戦力になれる体調ではないから、チ・フルルーとパペールにが

んばつてもらうしかないの。

ね、だから私が行くよ」

と言つて、氣丈に笑つて見せた。

チ・フルルー曰く、ゴーレムの腕はまともに打ち倒したのでは壊れてしまう。だから、そうする前に一撃で相手を絶命させる技術が必要で、その技術をハラヘルスは誰よりもうまく使えると言う。

さらに、ゴーレムには実は二列に分かれた敵がいると後衛を無条件に狙う習性があるらしい。だから後列にコルネオリとカチドキを配置してコルネオリにガードさせておけば実はハラヘルスには危険はない。後は、ゴーレムまで無事にハラヘルスを連れていけるかどうかだけが勝負。

1回カマキリに捕まってヒヤヒヤしたが、なんとか無事にたどり着いて勝利。以前会ったときとは比べモノにならないくらい弱体化していたハラヘルスだが、それでもまだ腕は健在だ。

そしてシリカ商店で星砕きの戦斧が完成。チ・フルルーもまだ本調子ではないけれど、復活の日は遠くなさそうだ。

## 第四階層（3）：皆伝、決意、そして死闘

・虹竜の月、4日

ロッドテイルから免許皆伝をもらいました。

すつげえ投げやりだったけど。要するに押しつけるネタが尽きたのと、いい加減やりすぎに気づいたんだろうな。……遅いわ。あー苦労した。

帰り際、マハから18階、19階、20階の地図をもらった。執政院のほうにもあるけど、たぶんいまは出してもらえないだろうから、という話だ。すげえありがたい。礼を言うと、マハはちよつとためらってから、

「どう、勝てそう?」

と聞いてきた。

……不意打ちだったので答えは用意してなかったが、それでもなんとか——たぶん、と答えることができた。

マハはそっか、と笑って、

「がんばって。」

たぶんレンさんも、ホントはアイノテたちのこと、殺したいなんて思っていないだろ



うから」

と、告げた。

それで終わればよかつたんだがワテナがいきなり近づいてきて、

「言うの忘れてた。あのさ、レンつてうちらと戦つたときと戦法ぜんぜん変わつてると思ふよ。」

あいつもさー、ああ見えて意地つ張りじゃん？ 構えも使わぬ素人に負けるなど自身の未熟としか思えんとか言つちやつて、負けを認めないんだよねー。往生際悪いつての。負けは負けじゃんねー」

……それを早く言つてくださいワテナさん。ぶつちやけいまの助言で戦闘プランが完膚なきまでに崩れ去つたんですけど。

まあいいさ。ともかく21階まで着くことが先決だ。幸いレンはモリビト達に知らせておいてくれると言つていたから、簡単に通れるだろ。

・虹竜の月、6日

畜生レンの奴、知らせておくつてこういうことかよ！

18階に着いた途端、待つていたのはモリビトと思しき戦士たちの大群。それまで魔物なんてほとんど出てこなかつた大平原は、途端に戦場と化した。

予想していなかった俺たちは大苦戦。回復のための水場を確保しつつ少しずつ大平原を探索し、なんとか正解と思しき通路を見つけるまでに1日かかった。街に帰れなかった……日付がずれているのはそういうわけだ。

で、野営しているところに相手の強力なカースメイカー部隊が奇襲。危なく呪い殺される場所だった……マンティコア戦で余ったテリアカβが、思わぬところで役に立った。

それでなんとか19階への通路を確保し、ついでに自分たちにしかわからないように秘密の出入り口を作って撤退。あー、マジで危なかった。

・虹竜の月、8日

今日も1日以上以上の仕事だった……

第四階層の樹海磁軸が、モリビトのテロによっておかしくなっちゃった。18階の大平原が妙なことになって、平原の中に小さな見えざる迷宮ができてしまったらしい。

とりあえず壁を経由していけば19階まで到達できる経路は確保したんだが、それだと回復の泉が使えない。その経路をがんばって探り当てようと思っていたら滅茶苦茶遠回りしなければならなくなつて、結局諦めかけたところでへんな木に突き当たつていきなり周囲の迷宮が消えた。なんだつたんだ……

そして撤退。くそ、一向に進めねえな。

・虹竜の月、10日

このところ、1日では帰れないのが定番になっている。樹海の奥深くはそこまで遠いんだな……

19階の地図は渡されているので隠し通路とかはわかっているのだが、相手もそれに気づいて20階への階段のところまで張つてやがる。仕方ないので奇襲するために迂回路を探っているうちに、俺たちはぼったりツスクルと出くわした。

「……元氣そうね。よかった。

レンは、第五階層に登ってきた敵をあらかじめ駆除し終えたところ。いまならいつ行っても21階にいると思う」

と言われた。やっぱり超人なんだなアイツは……いや、目の前にいるコイツも同類だ。ぶつちやけ、カチノへなんかとは気配の質が違う。あつちはうさんくさい山師とか思えないが、こつちは目にしただけで死と疫病を連想させる呪い師だ。

思っていると、ツスクルは言葉が続けた。

「レンは——亡霊に縛られている。

悔しいけれど私にはどうにもできない。私は縛ることや呪うこと、傷つけることはで

きるけれど、それを解除することができないから。

だから、お願いします。彼女と私を、倒して欲しい」

そう言つて、彼女は俺たちに背を向けた。

去りゆく背中に、おい、なんでおまえはレンに協力するんだ？ と尋ねる。答えは期待していなかったが、彼女は少しだけ立ち止まって振り向いた。 と尋ねる。答えは期待していませんでした。彼女が少しだけ立ち止まって振り向いた。

「いまレンの側を離れたら、レンは見捨てられたと思つてしまうだろうから。

ごめんなさい。レンが戦う限り、私も戦う。それだけ変えられないの」

そしてそんなことを喋っているうちに、俺たちはモリビト達に囲まれていた。

かろうじて血路を開いて撤退。外に出たらもう夜が明けていた……なんてこつたい。

・虹竜の月、111日

イナナ姉さんに導かれて隠れつつやってきた20階。ようやく降りてきた俺たちを待ちかまえていたのは、あのモリコだった。

「アルルーナのときは知らなかった。おまえたち、25階よりさらに下を目指すつもりらしいな。

悪いがそれはさせない。古くからの盟約に従い、私はおまえたちを排除しなければいけない」

盟約ってなんだよ、誰との盟約だ、と聞くと、ヴィズル殿とのだ、という答えが返ってきた。……死人じゃねーか。そんなのに義理立てしてどうする気だ、と言うと、モリコは初めて見る、悲しそうな表情をした。

「千年だ。千年間もずっと、我らはその死人たちに義理立てして生きてきたんだよ。

いまさら変えられない。樹海の謎を暴こうとする者は、ここで排除させてもらう」  
ぱちん、と指を鳴らした途端、とんでもない気配が山ほど、近づいてくるのがわかった。

樹海は視界が悪いので集団戦に向いた地形ではない。

だから樹海で戦争をしようと思えば、広域に展開して、敵を見つけ次第急激に戦力を集積するやり方しかない。

グレイロツジはそれらの敵を集積させるに任せつつ、正面から撃破したと聞く。長期戦になったが、彼らは勝った。

ロツクエツジは、持ち前の高火力であつという間に敵を屠るやり方で、一気に各個撃破したらしい。アシタらしい戦法だと思う。

俺たちは、それら2ギルドのどれとも違う。どちらの戦法も、英雄たちだからこそできた戦法だ。だが俺たちは英雄じゃない。

だから、——イナー姉さんのとっておきの秘策、名付けて超ヒット&アウェイ作戦に

頼るしかなかった。要するに、敵を19階への階段寸前まで引きつけて速攻撃破し、即座に19階まで退避してまた戻る。体力が尽きたら18階まで撤退して回復し、これを繰り返す。きわどい場面もあったが、かろうじてすべてを撃退し、地図に記された21階への階段へ向かう。

モリコはそこで待っていた。モリビトの守護者、偉大な黄金の鳥イワオロペネレプと共に。

「これが最後だ。モリビトの意地、最後の戦力を抜けられるのか——試してみるがいい！」

宣言するモリコ。高らかに鳥が鳴き、そして最後の戦いが始まった。

苦戦はしなかった、と思う。実力的にはたしかに押されて然るべき相手だが、相次ぐグレイロτζジの難題を解決してきた俺たちは、連携能力が格段に上がっていた。——そう、個人で勝てないなら集団で。冒険者の基本だ。

最後、コルネオリのシールドによって地面に打ち倒され、弱々しく鳴いて動かなくなったイワオロペネレプを見て、モリコが泣き出した。ちくしよう、なんで人間なんかに勝てないんだ、と言って。

……いや、そんなの当たり前だろ。おまえだって気づいていないわけじゃねえだろう。俺たちは戦う理由と覚悟があつて——おまえたちは、もうぶつちやけ、戦いたくない

いんだろ。

そんなこと、と叫んだモリコがそこで絶句する。当然だ。こいつだって——誰にだってわかる。長く続いた戦争で、モリビト達はもうボロボロだった。

俺たちには作戦があつたし知識があつた。だがそれを差し引いても、傷だらけで動きが鈍いフォレストオウガや、喉をやられて火が吹けないフォレストデモン、ろくに動けないイワオロペネレブは俺たちにとつて難敵とは言えなかつた。彼らがもしグレイロツジがここを抜ける前の戦力を保持していたら、俺たちは勝利できたかどうか。

もうやめろよ。これ以上戦つてもおまえ達はさらに傷つくだけだ。そんなことをして、千年も生きてきた歴史を踏みにしつて滅びるのは馬鹿みたいだろ。そろそろ——潮時じゃないのか。

だがモリコは泣きながら叫ぶ。うるさい人間、樹海は私たちのものだ、おまえたちなんて千年も前に私たちを生むだけ生んでおいてさつさと上に逃げたくせに、ヴィズル殿を千年も放つておいて勝手に繁殖した奴らが戻ってきたら我が物顔で闊歩してるんじゃない吐き気がするっ。

……そんなの知らねーよ俺は。知ってるのは、おまえたちがなんだかわからないものために戦つていて、このままじゃなんだかわからないまま全滅する。それだけだ。

なあ、おまえたちももうたくさんだつて思つてるだろう？ と周囲に呼びかける。顔

を上げたモリコが見たのは——ずらっと周囲に勢揃いした、傷だらけのモリビト達だった。

男も女も、子供以外は傷のないやつなんていなかった。すげえな、こいつらみんな勇敢な戦士だった。楽勝できた奴なんてひとりもない。

でも、もういいじゃないか。おまえたちは千年がんばってなにかのために尽くしたんだらう。もうそろそろ——次に行こうぜ。なあモリコ。そう言うとな彼女はモリコって言うな、と言って、……初めて少しだけ、笑顔を見せた。

知ったかぶって高説垂れ流して、俺もいい気なもんだね……と思ったが、この際目をつぶりたい。目をつぶってみんなが幸せになるなら、それでいいじゃねえか。

ああもう、それにしても疲れた。なにしろこつちだつて傷だらけだ。コルネオリだけはピンピンしているが、あいつは身体が超合金で出来てるからな……そしてその相手をするのは俺。勘弁してくれ。こらカチドキ逃げるな。



## 第五階層（1）：青と白

・虹竜の月、13日

モリビト達を下した翌日。俺たちは、モリコの案内で21階へ降りる階段へと来ていた。

「ここを降りればシンジユクのトチヨウとかいう名前の遺跡の中に出る。」

第六階層の敵はレン殿に押されてまだそちらまで来ていないようだが——時間はあまりないと思う。だから急げ」

という。ぶつちやけ、ここまで協力的になるとは思わなかった。けどなぜシヨロロとだけ目を合わせようとしないうらら。シヨロロのほうもすげえ険悪な目でにらんでる。仲良くしろよなおまえら、とひとごとつぽく言ったらふたりからぶん殴られた。

……な、なぜ？

そして樹海磁軸に到達、撤退。休みたいところだがそうはいかないだろう。ふたまたに分かれた不思議な遺跡の中で、レンとツスクルが待っている。

・虹竜の月、14日

ふたまたに分かれたビルとビルをつなぐ、水晶で出来た木みたいな橋の上。そこで、レンとツスクルが待っていた。

戦うことが決まっている以上言葉を交わす必要はない、とレンは言ったが、それだとこつちは気になって集中できない。改めて、なんで俺たちと戦う、またどうしてグレイロツジやロックエッジと戦ったんだ、と尋ねた。

「——グレイロツジから聞いたのか。」

そうだな。初めは、私の主からの命令だった」

レンは、ぼつぼつと語り出した。執政院の長ヴィズルの奸計。樹海が人を呼び寄せて街が栄える以上、街のために樹海の謎は決して解けてはいけないのだと——そう考えたヴィズルは、モリビトとグレイロツジを共にけしかけて争わせ傷つけさせ、それでもグレイロツジが止まらなるとわかると、今度はレンとツスクルに奴らの撃退を命じた。

だがふたりは負けた。負けただけじゃない。その後、身体を張って止めようとしたヴィズルもまた、共同戦線を張ったグレイロツジとロックエッジの前に命を散らすことになった。

「主には大恩ある身。私は全力で彼らを打ち倒す義務があつた。

しかしそれは果たせなかつた。それで疑問に思つたのさ。これは正しい結末なのか、それとも私の未熟故に間違いが起こつたのか、とね」

そうして、レンは迷いはじめた。

迷いながらも、レンは続けて降りてきたロックエッジを迎え撃ち、——迷い故に、ふたたび膝を折る。二度目の敗北は、はつきりと自分の実力ではないと悟った彼女は、せめて正しい結末に至るために自分になにが必要であったのかが知りたいと……それを求めて、ずっと樹海をさまよっていた。

そこに、ヴィズルが復活したという報告が入る。

ならば、我が使命は今度こそ果たすべきもの。

グレイロツジ、ロックエッジの精鋭には通じずとも、それ以外のなんびとたりともヴィズルの元には行かせない。今度こそ——迷いなく、そうしようと願った。

「それだけのことさ。」

地下に現れたというヴィズルがなんなのかはわからない。オバケ、亡霊なのかもしれないし、なりすましかもしれない。

そう、そんなのはどうでもいいんだ。私は私として、ヴィズルのために命を果たす。後は余分だ」

そう言つてレンは刀を抜いて——迷いなく、こちらへと向けた。

「勝負だ。ホイスビーの諸君。……氷のレン、参る」

言つた直後に先制したのはイナー姉さんの矢。迷うことなくツスクルの肩に突き刺

さり——集積ペイントレード、というツスクルの声と共に、どすどすどすとイナー姉さんの身体に矢傷が現れて血が吹き出て倒れて動かなくなった。瞬殺。

それを視界の片隅に入れつつ、俺は矢のような速度でカチドキに向けて走るレンに横から斬りつける。一合。二合。ちくしようやっぱ三合が限界か。剣を飛ばされそうになつた俺の横からコルネオリが盾を構えて突撃し、ふたたび前のように盾の内側へとあつさり入れられ——そして、どす、とそのレンの肩に、矢が突き刺さつた。カチドキ。楽器を捨ててまで攻撃を優先したのか。一瞬ひるんだ隙にコルネオリが態勢を立て直してシールドスマイト。レンは飛んだ。飛んで橋から落ち——と思つたら、側面のでかい水晶の柱に足をかけてさらに飛び、一気に俺に斬りかかる。フォローしようとしたカチドキの首にツスクルの手から出たツタがからまり、カチドキが血を吐いて倒れた。

詰み。そう、俺たちがどれだけでもこれ詰みだ。——前は震えているだけだった、つまりは手の内を一回も晒していないヤツがいなければ。

飛びかかるレンに向けて炎が走る。その火を受けてさらにチェイス。対抗するレンは——畜生、空中で抜刀氷雪かよ！ がきりと剣が交錯し、その隙に俺の胸を足場にしてレンが後ろへ跳躍。だがそこにコルネオリが突進！ さすがに態勢を崩されたレンはそれでもコルネオリを押し返したが、ツスクルに向けて走る俺を止めることは、できなかつた。

峰打ち一閃。ペイントリードで返すこともできずに倒れたツスクルを背に、俺はレンに言った。もうあんた一人だ。降参しろ。レンは、初めて意表を突かれたような表情をした。君、それは本気で言ってるのかい。だってほら、さっきまでは2対5でノルマ2、5人。いまは1対3でノルマ3人。な、ちよつと増えただけじゃないか。真顔で言い放ったレンは、初めて見る不思議な構えを見せた。

「八相の構え、と名付けた。もつとも名前にはあまり意味がないんだ。

構えとは技術の体系を指す言葉。私ぐらいにしか使えないモノを構えと名付けても、あまり意味はないだろう？」

ククク、と鬼神のように彼女は笑い、そして——悪鬼羅刹も裸足で逃げ出す、剣の暴風が始まった。

いやもう、ホントになんにもできねー。一応シールドを構えてじつとしていればなんとかなるんだが動こうとすれば即死級の剣舞が飛んでくる。シヨロ口だって術式の間に合いに入ろうもんなら即殺されかねないんで怖くて入れない。コルネオリと共に亀みたいに固まったらシールドに名前刻まれた。畜生、遊んでやがる。

最後はそれでも、シールドに身を隠したまま橋の端に押しつけるように追いつめたコルネオリから逃れようとふたたび飛び上がったレンを、先読みしていた俺がシヨロ口の大雷嵐の術式を乗せたチェイス剣で迎撃して吹っ飛ばし、降りた先をまたコルネオリが

シールドで叩き据えて辛うじて勝った。マジでこいつとは二度と戦いたくねえ。

「……なんで殺さない？」

ぜんぶ終わった後、息を乱して倒れているレンが言った。

「私たちは本気でおまえたちを殺そうとしていた。たぶん他の連中が来てもそうだ。

アイノテ、熟練の冒険者である君らしからぬ落ち度だ。復活して再び剣を向けるかもしれない相手に慈悲は要らん。とどめを刺せ」

言って目を閉じる。

つつたつてなあ。グレイロツジだつてべつにあんたを殺しはしなかっただろ。そう言ったらおまえたちはグレイロツジの出先機関かと笑われた。う、そ、それは痛いところを……じゃなくて。

俺が言いたいのは、奴らと同じってこと。ぶっちゃけ、レンとはもう戦いたくない。そして俺は、レンはきちんと正気に返れば戦わないで済むと思ってる。

「正気。」

私が狂気だと言うか、若造」

ああ、シラフにや見えねえ。だつてアンタ——結局もう、戦う理由なんてないじゃねえか。

レンは唇を噛んで、返事をしなかった。

だから俺は続けた。モリビトだってそうだ。もういい加減やめとけよ。アンタは俺たちに向けて潮時だって言ったが、実はアンタ、あれ自分に向けて言ってただろう？

「違う。あれは私なりの慈悲だ。

ずっと君たちを見てきたから、これ以上進まれて、自分たちの手で殺すのが嫌だったんだ」

そう、ロックエッジの時も思っていたんだらう？

「……………」

はは、そうか。そうだったな」

未熟故に負けたんじゃない。アンタは自分の気持ちに負けたんだらう。

なあ、レン——結局今回も、迷いが出て負けただろ。その迷い、アンタがあのととき俺たちを殺さなかった理由そのものじゃないのか。アンタはもう誰も殺したくなんかなくて、身体が拒否してるんじゃないか。

「——黙れ。

私はいま、とても混乱している。これ以上言ってくれるな」

じゃあ約束だ。頭が冷えたら、金鹿の酒場に来て飲もうぜ。そのときに、返事を聞かせてくれ。

「…………約束しよう。」

いまは、行け。ホイスビーの諸君。君たちはもう、我々が止められるレベルの冒険者ではなくなった」

結局、その日彼女は酒場には来なかった。

……たぶん、もう少し時間がかかるだろう。

それでも。

いつかまた、アイツはアイツらしい姿で俺たちの前に現れるだろうと思う。

それまで、しばしの休息を。超人だって休みは必要なのだ。

そしてこの名前入りシールドどうしよう。正直構えていると恥ずかしいんだが売り払うのも忍びないし。



## 第五階層（2）：休養、深層、そして馬鹿

・虹竜の月、15日

イナ―姉さんとカチドキが少しの間、休養することになった。

まあ、かなり致命的な打撃受けてたし。ネクタルたったってアレは基本的に気付かけ薬。ああいう具体的損傷には、天下のケフト施薬院もなかなか対処できません。一応カチドキのほうは立って歩ける状態ではあるんだが、喉がアレなので水を飲むのも一苦労。しばらくは絶食しなきゃいけないということで、とりあえず動ける状態じゃなさそうだし。

で、レンは来なかったが、今日はツスクルが酒場に現れた。

「うまくやってくれたみたいね。ありがとう」

という彼女曰く、ツスクルが意識を取り戻すとレンはひとりで支度を始めて、ちと自分を見直してくるからその間のことは頼む、と言い残してどこかへ行ってしまったらしい。……勝手だなオイ。そう言ったら彼女は笑って、

「そうね。でもそれはいいことだから。」

私はレンの友人だから、レンが必要とするときだけ近くにいてあげればいいの。彼女が要らないと言ったときまで、べたべたする必要もないわ」

と、達観したように言った。

それで、いろいろわからなかったところを聞いたんだが、結局ツスクルもあんまり詳しく事情を知っているわけではないらしい。

わかったのは、ヴィズルという例の人物はただの執政院の長だったわけではなく、たぶんグレイロツジを襲った理由も表向きの理由とは違うわけがあったんじゃないか、ということだった。……なんだかわからん理由で殺し合いを命じる人間か。友達になりたくないタイプだな、と言ったら、ツスクルは深くうなずいた。

「うん。でもレンにとつては恩義あるひとだったから。」

私は彼に関わるべきではないと思っていたし、だからこの迷宮はさっさと踏破されてしまえばいいと思っていた。そうすればレンもヴィズルとももう関わらないで済むと。それでグレイロツジを誘導して、迷宮の奥へ案内したこともあったわ」

だからこそ、ヴィズルから信用されなかった彼女には、大きな秘密は手に入れられなかった。レンはまた違うことを知っているのかもしれないけれど。

「いずれ、レンはまたあなたたちの前に姿を現すと思う。」

そのときに、いろいろ聞くといい。私は——私にとつては、これはもう終わった話だから」

そう言って笑う彼女の顔色は、いつもより心なしかいような気がした。

そしてイナー姉さんが部屋を訪れたパペールからいろいろ聞き出していた。なんでも一撃で相手を倒す攻撃力がどうか。急に勉強熱心になったな。まあ、そうでないと痛い目に会うということも思い知ったからなんだろうけど。

しかしあの2人が並ぶと、なんとというか……顔だけはベテランのイナー姉さんと、童顔＋女顔でどこか頼りないパペール。なんだか力関係と外見が奇麗に逆方向向いているあたりが見ていて愉快すぎる。次にパペールに会ったときに、うっかり笑い出さないように注意しよう。

・虹竜の月、16日

最近、マハとようやく互角に近い戦いができるようになってきたので、調子に乗ってその場にいたチ・フルルーと稽古。手も足もでねえ……あの斧、盾で受けるだけでじーんとなって動けなくなるんだが。それを暴風のように連打されると俺にはもうどうしようもない。

で、それを後ろから見ているシヨロロにケラケラ笑われた。テメエ文句あるなら自分で戦ってみると言ったら、

「へえ、じゃタツグ戦でもやる？　ボクとアイノテで組んで」

とか抜かしやがった。チ・フルルーもそれを聞いてちよつと考え込んで

「アシタさんがいれば……」

マテ。つーかタツグ戦で片方メディックありって詰みとか言いませんか。アシタが後列に下がって医術防御しているだけで普通に勝てる気がしねえ。そう言ったのだが、「え、そんなことないですよ。ほらコルネオリさんと組めば普通にアリじやないですか」あーなるほど。たしかに防御陣形組んでフロントガード連打してたらトルネードでアシタを削れる分俺たちのほうが若干有利か。そう言ったら今度はシヨロロがにやりと笑って、

「えー、でもボクがアシタさんと組んだら勝ち目なくない？ それ」

馬鹿野郎。そしたら俺はパペールと組んでアザーズステップ↓トルネードで一気に狩るわい。そう言ったら不満そうにしながらもシヨロロは反論しなかった。……まあ、それこそ詰みだしな。

しかしこう考えていくと、なかなかコンビで最強の組み合わせつてのも見つからないもんだな。コルネオリとアシタが組めば俺たちには手も足も出ないが、今度は攻撃力不足が原因でハラヘルスとカチノへのコンビに勝てなくなりそうだ。でもハラヘルスとカチノへじやち・フルルーとワテナの組には勝てないだろうし……ダメだ。決め手が見当たらない。案外ナリアンテスとカチドキとか悪くなさそうだけど。ドレインバイト＋奇想曲の組み合わせは案外えげつない。

そしてそんな雑談に明け暮れているうちに日が暮れた。つーかフルメンバー揃わないとうちもロックエツジも動きようがねえな。

・虹竜の月、17日

動きよう、ありました。

よく考えたらアクティブメンバーって俺たち3名＋ロックエツジ2名でちょうど5名、迷宮で自由に動ける最適人数じゃん！ ということに気がついた。というわけでチ・フルルーとパペールがうちに参戦、いきなり第五階層を飛び越して第六階層を垣間見るようになった。

で、ロックエツジが現在苦戦中の27階へゴー。ご、ゴー……なんじゃこりやー！

脆い地面の大平原。ちと足を踏み外せばいきなり28階の針山に叩きつけられ、そしてそこにヤバイ大ききの鳥が襲ってくる。回復役がない俺たち大ピンチ。どうしよう……と思っていると、シヨロロJrから提案があつた。

「あのさ、この階層には強くて大きい生き物がすごく多いから、その生き物たちの動く気配を探っていけば通れる道がわかるんじゃないかな」

おまえ天才。つーことで、使ったことがほとんどなかった千里眼の術式が大活躍。あつという間にあらかた動ける場所の地図を作り終えた俺たちは、執政院に情報を渡す

ためにいったん街へ帰ることにした。

……あー、しかしあの階層はいまの俺たちの手に負える場所じゃないわ。いちおうパールの指示で相手より早く索敵し、見つけたら即座に逃げの一手。どうしようもないときにはアザースステップ↓防御陣形↓チェイスシヨック+大雷嵐の術式、でほとんどの敵には対処できるが、それを抜けられると一気に崩される。戦うつつても体力的には限度があるし、獣避けの金鈴が山ほど必要でみるみる減っていく。やはりこの案には無理があつたか。まあ、ふたりの超人と共闘できたのは、それなりに楽しくはあつた。

・虹竜の月、18日

カチドキが行方不明になつた。

なんでも、喉がようやく治つてきた記念に広場で早口言葉の練習をしていたら、ちょうど宿屋の従業員が餌をあげていた。ペットのネズミが驚いて逃げ出したらしい。それでわたしの声に文句あるのかテメエーと叫びながら追いかけていったんだそうだが、困ったことにそのネズミはなにかあると樹海を散歩して下へ下へと行こうとするやつかいな習性持ちだった。で、未だカチドキ帰らず。なにやっつてんだ……ていうか、飼うならきちんと管理しろよ。そんな危険なネズミ。

で、とりあえず酒場に搜索願を出したらバード5人兄弟とかいうクレイジー過ぎるギ

ルドが名乗り出た。イケニ5兄弟とか言うらしいがそもそも君ら外見で区別がつきません。そう言ったら長男が笑いながら、

「うん、俺も次男と四男の区別はつかん」

……それ以外は付くのかよ。信じられねー。

・虹竜の月、19日

カチドキが、カチドキRになって戻ってきた。

なんでも13階でイケニ5兄弟と共に泉の精霊と名乗る酔狂なモリビトと出会ったそう。どうもバードが大好きらしいそのモリビト（通称：ピンコ。いま決めた）は、6人もバードが現れたことにいたく感激したらしい。このなかでいちばん私を楽しませたバードに素晴らしい加護を与えましょう、とか言われてイケニ5兄弟は即座に芸大会を開いて競い合い+けなし合いの骨肉の争いモードに入ったが、カチドキは自称ジャーナリストなのでビールと落花生片手にピンコと雑談しながらそれを見ていたらしい。……常備してるのかよ teme。酒飲みめ。

で、結果として兄弟は全員疲れ果てて自滅。すっかりピンコとお友達モードになったカチドキがなし崩し的に加護を受け取ることになった。なんでも、名前をカチドキからカチドキRに変えることで風水の加護を得てパワーアップ、って話だが……効果あるの

か、それ。

ちなみに例のネズミは今日、俺たちが26階をさまよっているうちに偶然発見。……どこまで潜ってるんだおまえは。竜に踏みつぶされるぞ。

・虹竜の月、20日

イナ―姉さん、退院。

まだ傷は癒えきっていないし明らかに無理してるんだが、自分は前線の主力じゃないから完調でなくても大丈夫、という。

ちようど27階も手詰まり感があつたし、パペールとチ・フルルーにはふたたび調整生活に戻ってもらつて、俺たちは無難に21階から下へ行くことにした。なにしろ最近24階のほうでもトラブルが起こっている気配があるそうだし、そもそもあのあたりでまともに動けるギルドはグレイロツジとロツクエツジとうちしかいない。絶対的に人手が足りてないのだ。

で、探索してみたらいきなり詰まった。グレイロツジの活躍によつて動き出したはずの昇降機が、なぜか動かなくなっていた。しかも箱の中からはカサカサ、カサカサというとても嫌な音。む、虫は苦手だ……とか言つたらシヨロ口に馬鹿にされた。なんとでも言え。嫌なモノは嫌なんだよ。



そういうわけでもずは後回しにして周囲を探索。しかし改めて思うが、こんな足場でよく俺たち戦えたな。足踏み外したらまず生きてねえよこれ。

・虹竜の月、21日

最近、シヨロロが絶好調。

大雷嵐の術式連打しているだけで敵が勝手に潰れていく。こつちの財布もどんどん潰れていく。

勘弁してくれ。アムリタは有限なんだぞ、と言ったら、じゃあ先に24階の泉を確保しようよと提案された。よしそれで行こう、と調子に乗って遠出して破滅の花びらに先制されて全滅しかけて泣きながら撤退。こういうの、最近は久々だな……

・虹竜の月、22日

アーマービーストが堅すぎてめげそう。

なんだアレ。勘弁してくれ……時々シヨロロの大爆炎の術式をかくぐつて生き残る個体がいる、それを処理させられるときの苦労と言ったらもう。そしてぼやっとしていると熊とかワニとか竜とか襲ってくるし。なんだこの階層、と言いつつふと気づいたんだが、そういうばここつてすごい深層なんだよな。やばい、この前まで第六階層にい

たせいで変な錯覚してる？

・虹竜の月、23日

最悪。

昇降機をどうにかする方法として、とりあえずグレイロツジが昇降機を動かし始めたときのやり方を真似てみようとかチドキ（Rとか面倒だから省略）が言い出した。

まあ結局俺たちも昇降機なしで25階に降りる手段は見つけられなかったわけで。窓から飛び降りる、という手も考えたが、下になんだかわからない水晶の破片やらなにやらがトゲみたいに乱立している危険な状態なので、できれば遠慮したい。

そうして俺たちはその機械室に入った。こういうところではシヨロロの独壇場になる。いろいろ調べているのをぼーっと見ていた俺たちだったが、暇になったコルネオリが壁際によりかかったところ、ぼち、という凄じい嫌な予感のする音がした。

ぎー、がしやんがしやんがしやん。そんな音がして、部屋の正面パネルの中央に悪趣味なドクロ印付きのスイッチが飛び出てくる。明らかにナニカのセーフティを解除したっぽい。そうは思ったものの、最後のボタンが押されてなかったために、そのときまだ俺たちはさほど警戒していなかった。なんだよこれー。バカ変なものに手を出すな。知ってるよこれハドウホウとかそういうのの発射装置だよきつと。なんだそりや、テキ

トー言つて押しして変なことが起こつても知らねーぞシヨロロ。おいカチドキ、テメエなに押しそうとしてやがる。

——冗談で押すふりをしたカチドキが、地面のなんでもない箇所につつまづいた。神速でコルネオリが飛び込む。それはよかつたんだが盾でがつんとぶつ飛ばしたのがいけなかつた。アオリを食つてシヨロロがコンパネ側にのけぞつてひっくり返りそうになり、それを支えようとした俺は、急だったのでバランスが取れずに一緒にひっくりこけた。ぼち。ぼち。なんだいまの音。ハハハそんなの決まつてるじゃん背中がボタンを押しした音さー。

上部スクリーン点灯。鮮明に映つた地底の遺跡のなかで、外の洞穴に向けて光の帯が突き刺さるのがはつきりと見えた。次いで爆音。さらには、なにかヤバイ獣がきしやあああああ、と怒り狂う音。ヤベ、本格的にマズいモノを直撃しちまつた！ ちくしょうハドウホウめどうせなら一撃でぶつ倒せば害もないものを。

後でパベルルから聞いたところ、雷鳴と共に現れる者、とかいうごつつい名前の竜が25階に居着いちゃまつたらしい。あーあ。俺知らね。こらカチドキ、テメエなにを共犯者面してやがる。同類だと思われたくないからあつち行けあつち。

## 第五階層（3）：始末、復活、そして呪い

・虹竜の月、24日

執政院からミツシヨン発動。25階の様子を見てこい、だそうな。要するに責任は自分たちで取れと。はいはいたしかに俺たちのせいですよ。おのれ。

で、ともかく昇降機が動かないと話にならないってんで、こりやもう突撃しかないかーとばかりに行ってみて死にかけた。虫くらい閉鎖空間に大爆炎ぶちかませば死ぬだろとか思ってたら相手めちやくちや早くてあつという間に這い出てきやがって、しかもタフだからなかなか死なない。そして糸がどんどん絡まる。シヨロ口の術式が無力化されたタイミングでギリギリ俺が動けるようになったのと、防御陣形が崩れた頃ちようどコルネオリが盾突撃可能な態勢を整えたおかげでなんとか勝てたが、もう少し遅かったら終わってたな。

で、虫掃除を済ませて、ケーブルの点検も終えてなんとか25階への道を確認。あー疲れた。

・虹竜の月、25日

25階はゾウみたいな超でかい魔獣がうろろうろしている本物の魔窟だ。そのくせ、小物もえらく大量に出るので始末が悪い。グレイロツジが先だつて隠し通路を見つけてくれていたんだが、その隠し通路の着く先には竜がいらつしやる。仕方ないので地道に行くしかなさそう。ガツテム。

で、動いていたら遺跡の外の地面に変な鉄のでかい箱発見。シヨロロ曰く、古代の乗り合い馬車の類と考えられているらしい。マジかよ。あんな箱のどこに馬をくくりつけるんだ？

・虹竜の月、26日

アシタ、電☆撃☆復☆活。

なんでも右腕が動かなくなつたからつてすっぱり切断した上でシヨロロ父に相談して錬金術式の義腕を装着したらしい。その決断の早さにもびっくりだがアシタの真価はそこから先。右腕動けば後はどうでもいいとばかりにさつそく現役復帰を宣言し、パールの止めるのも聞かずに俺たちのところにやってきて

「というわけで復帰戦はあのナマイキそうな雷竜にするから。キミたちサポートよろしくー」

無茶言うな。つーかなんで俺たち？ と聞いたら、だつてロックエッジつていまパラ

「デインいないんだもん、と言う。医術防御あれば強いパーティでガチ戦闘してもなんとかなるかもしれないけど、いまの体調じゃ無理だしエリアキュアって実はあたし苦手なんだよねーアハハ。だからコルネオリのシヨックガードちようだい。ついでだから残りも一緒に来なさいこれ決定事項ね。すげー。あまりの横暴さにシヨロ口がぶち切れたが、アシタはどこ吹く風でじゃあキミは来なくていいよ。でもコルネオリは当然来るよね？ ハハハ忘れてた、あいつ狂信者でしたねそういえば。そうして当然のようにコルネオリを味方につけたアシタはなぜか俺に向かつて、

「それじゃ明日の5時に樹海磁軸26階集合ね。遅れたら死刑」

と言い放つて去っていった。……オイ、なんで俺は参加確定してるんだ？

・虹竜の月、27日

雷竜轟沈。やったネー！ マジかよ。

いやもう、アザーステップ＋医術防御がいかにより得ない強化スキルかということを書いて知った一戦だった。たまに強烈な一撃が飛んでくるんだが効きやしねえ。肝心の棍棒はアシタの腕のほうの調整不足でいまいち揮わなかったが、その辺は俺たちでどうとでもなる。シヨロ口がないのでチエイズ剣こそ使えないがそこはそれ、トルネードでがりがり削って長期戦を制し勝利。最後アムリタによるドーピングに多少頼った

とはいえ、余裕でした。

で、勝利を祝って酒場で宴会。アシタのヤツは酒が入ってもそのまんまで、要するにアイツはシラフでも酒が入ってるのと大差ないようなヤツなのだ。カチドキの同類か。最近そんな人間ばっかりだ。

とはいえ、アシタの傷は本当に完治してはいなかった。そりやそうだ、あそこまですぶつ壊れたら人間元通りなんてなれねえよ。現に、彼女の衣装の肩口から見える肌には、生々しい傷痕がはつきり残っている。見入っていたらアシタはちらちらそれを見せ、ホラホラせくしーだろ惚れるなよとか言つてきやがった。——まあ、こいつはこういうヤツだ。

それで、最初のバカ騒ぎが幾分落ち着いたあたりで、俺はさっさと早引けして宿舎へ戻り、……もうひとりの、困ったちゃんをフォローしておくことにした。

案の定、シヨロ口はものすごく怒っていた。アイノテのバカ、みんなさっさとロツクエツジでもなんでも行つちやえはいんだ、みたいなことを言つて部屋に入れようとしなかった。

で、しようがないから俺は、部屋の扉ごしにアシタの真意（と、俺が思っていること）を聞かせることにした。

——そもそもこの一戦、本来はホイスビーが引き受けなければいけないものだった。

偶然の産物とはいえ、俺たちがやってしまったことだ。俺たちではじめを付けることができないければ、メンツは丸つぶれ、信頼は激減する。たぶんギルドの通常営業も難しくなつて、解散までは行かなくとも、深層を潜ることは諦めざるを得なくなるかもしれない。

とはいえ、ホイスビーの現戦力で雷竜を倒すことはまずできない。だからアシタは、いろいろ理由を付けて手伝ってくれたのだ。ロックエッジの仲間でなく、俺たちを連れていったのはそのせい。弱点属性の見えない雷竜にはチエイス剣使いの俺よりスタンバツシユ屋のチ・フルルーのほうが確実に使えるし、イナー姉さんと違ってパペールは戦闘も強い。パラデインが欲しければグレイロツジに掛け合つてマハを連れていけばいいし、バードだつてロックエッジにはチクタクというそこそこ使えるのがいる。俺たちを巻き込んだのは、なんのことはない、俺たちを巻き込むこと自体が目的だったからだ。

シヨロ口は返事をしなかった。まあ、しばらくは感情的に納得できないかもしれない。だから俺は、それ以上のことは特に言わず、早く寝ろよとだけ告げて自分の寢床に帰った。

さあ、明日からまた普通の探索に戻らないと。いろいろ遠回りしたが本来の目的はロックエッジを壊滅させたヴィズルの幽霊？ とかいうヤツについて調べる。か



つての決戦の地、25階を調べれば、その手がかりはきつとあるはずだ。

・虹竜の月、28日

案の定機嫌を直したシヨロ口も加わり、いよいよ25階を本格探索開始。

25階、広いなー。まがりくねった通路が多くてとても辛い。唯一の救いは熊が追いかけてきたとき。あいつ防御陣形仕掛けるとほとんどなにも怖い行動をしてこないから、その間にカチドキの唄で体力回復させながらぼーっとできる。癒しの時間だ。

そんなことをやっているうちに一応俺たちも回れるだけの箇所は回った感じがする。後は雷竜がいた場所の後ろとかその辺を残すのみ。

・白蛇の月、1日

参った。マジで身体が重い。

正直ペンを持つのも辛いのだが、日課をこなさないと気持ち悪くてしょうがないので寝る前に必要なことだけ書いておく。

雷竜のいた場所から、26階への階段をスルーしてさらに後ろに回った場所。そこに、ソイツがいた。

世界樹の王、ヴィズル。かつてそんな名で呼ばれたその男は、壊れた機械みたいに、秘

密を暴いた者に死を、と繰り返すだけの人形と化していた。

で、そんな状態にも関わらず、ソイツの壊れた意志に世界樹が反応した。反応して、かつてのグレイロツジに対するように、暴れ出した。

とんでもないパワーだった。まず王の威厳、と呼ばれる強力な威圧攻撃によって、俺たちはすぐ陣形を崩され、またカチドキの唄も効力を失ってしまふ。そして態勢を崩したところに、世界樹の根が大嵐のごとくうねり狂う。後でマハに聞いたら、サイクロンルーツ、とか名付けられた技術らしいがともかくとんでもなく強力で、防いでも防いでも削られ、ソーマがあつという間に尽きていった。

——勝てたのは、たぶん。相手が壊れていたからだと思う。何度目かの攻撃の直後、世界樹の動きがにわかにおかしくなった。エラー発生、自己修復機能を作動させます。そう言つて守りに入ったソイツは、カチドキの曲によってさらに機能を阻害され、ただ伸ばした枝でこちらの剣を払うだけの防御形態に入ってしまった。

そうなるともう、シヨロ口と俺の独壇場だ。伸ばした枝など、炎の前には無力でしかない。世界樹は焼かれ、裂かれ、人形のような男を手放して三度、眠りについた。

だが、俺たちは相手を甘く見ていた。

落ちた男の様子を見ようとしたその瞬間、男の身体から禍々しい光が放たれた。

瞬間、周囲にとんでもない呪いの波動が走り、近くにいた俺とコルネオリとシヨロ口

Jrはまともに受けちゃった。おかげで身体がとんでもなく重くなり、歩くこともままならない惨状になった。

ちなみに、怖がつて近づかなかったイナー姉さんと、そしてカチドキは無事。つーかなんでカチドキは無事なんだ。……風水パワー？ まさかな。

そして肝心なことにはなにもわからない。というかアレ、マジでなんのために襲ってきたんだ？

## 第六階層（1）：リハビリ、訓練、そして血戦

・白蛇の月、2日

かつてロックエツジが壊滅したとき、グレイロツジは第六階層を探索しており、残りのギルドは第四階層に到達するのにも苦労する有様だった。当然、第五階層は完全に人の手を離れ、そのせいでシリカ商店の在庫はすつからかん。施薬院共々、やりくりにはとても苦労していた。

俺たちが第五階層に行くようになってからその状態は劇的に（主にイナー姉さんの採集能力のおかげで）改善したのだが、それもつかの間の夢。ロックエツジはまだ本調子でなく、グレイロツジは相変わらず深層に苦戦中。そして俺たちがこの通りとあつては、また相当やりくりしに苦労することになるだろう。

そんな状況なのに、シリカ商店の店主が差し入れとか言つてアーチドロワーのごつつい弓をふたつもよこしてきた。いま無事なのがイナー姉さんとカチドキしかない俺たちにはとても助かる差し入れだが、同時に期待もひしひしと感ずる。——呪いの影響でまだ満足に動けない身としては、どうにも歯がゆい。

で、見舞いに来たマハとまた雑談。ヴィズルの話を振つてみたら、彼女は前と違って

知っていることを全部話してくれた。もうアイノテたちにも関係のない話じゃないもんね、と言って。

前の執政院の長、ヴィズル。その正体は、かつて汚れた世界を浄化して危機から人類を救うために行われた世界樹計画の、その唯一の見届け人だった。

その計画がなんだったのか、どの程度それらが進んでいたのか、そして——根本的に、それを知った人間がなぜ殺されなければならなかったのか。全部わからない。レン達は街の発展のためと聞かされていたそうだが、千年も前から生きている人間がいまさらその程度のこと執着するというのは、いまちりアリティに欠ける話だ。レンも薄々それには気づいていたようだったが、彼女は主の命令が守れば意図などはどうでもよいと判断したので、結果として彼の意図は永遠の謎になってしまった……はずだった。「でも彼は復活した。

ロックエツジを襲い、ホイスビーを襲い、彼はなにをする気だったんだろう。さつぱりわからない。できれば直接会って聞きたかったけど、倒された以上それも無理だね」マハは言ったが、俺は彼女とは違う意見だった。つまり——たぶん。直接会って聞いても無駄だったんじゃないか。

なんで、と聞かれたので俺は、たぶんあのヴィズルは偽物だと思う、と答えた。あの人形みたいな動きと、不自然すぎる戦闘行動、それからバカのひとつ覚えみたいな台詞

の繰り返しと、倒した後の不可解な呪い。全部不自然だ。マハやレンから聞いた相手の行状とぜんぜん違う。アレは誰か知らないヤツがヴィズルとやらを真似て作った、なんかよくわからん鉄砲玉だと思ったほうがいいんじゃないのか。

マハは反論しようとしたが、それよりも、ボクもそう思う、という声が後ろから聞こえてくるのが早かった。身体を杖で支えながら、重たそうな本を抱えたシヨロ口がずるずるこつちに向かって歩いて来るところだった。

「クローン、っていうやつなんじゃないかな。たぶん」

とか言う。なんだよそのクローンって、と聞いたら、挿し木って意味だよと返された。……ならそう言えよ。要は杖の一部を切り取って植えて育てる例の——待て。それ人間でもできるのか。なんか凄くグロイ想像しか湧かないんだが。そう言ったらシヨロ口がめちやくちやバカにしたような顔をした。あーあー悪かったね。どうせ俺はバカですよ。

で、シヨロ口の言によれば、動物のクローンっていうのは錬金術業界でも伝説の範疇に入る技術だが、第五階層の遺跡を作った文明ならあるいはできたのかもしれない、ということだった。今回のヴィズルと思しきモノは、そうしてヴィズル風の外見をした生物を育成し、それにヴィズル風の物言いを覚え込ませて動かしていたんじゃないかな。誰がだよ、と聞いたら知らない、とあっさり返された。そりやそうだろうけど。

ともあれ、このあたりで体力が尽きたので今日はお開き。わかったことは多いが、まずは動けるようになるのが先だ。なんとかしないと。

・白蛇の月、3日

俺たちの身体を縛る呪詛の名は、エンタングルレイというらしい。

診断したのはカチノへ。上級呪詛のひとつで、生半可な術者では扱えないものだとか。覚悟と免疫があれば数分で実害は消えるそうなのだが、今回みたいに不用意に呪と接触するとかかなり長く影響が残ってしまう、という話だった。

で、カチノへ曰く

「その呪詛はね……動くこうとすると対抗するタイプだから……動き続けていれば、力を使い果たしてなくなっちゃうと思うんだ……たぶん」

とのことで、テリアカαの投薬と平行して適度な運動を勧められた。動くのもだるい俺としては勘弁して欲しかったんだが、シヨロロはやる気満々で樹海でトレーニングしようと言いつ出した。おまえね、前衛が呪いで動けないってのにそんなんできるか、と言ったが聞きやしねえ。しまいにヤイナー姉さんとカチドキだけ連れてでも行こうとしたので、仕方なく付き合うことにした。——この辺、アシタの同類だなこいつ。殴られるの嫌だから言わねーけど。

そして第二階層から始めて即ケルヌノス撃破。さすがにこの辺は弱いな。後衛の弓だけで十分どうとでもなる感じ。

・白蛇の月、4日

調子に乗って挑んだ13階でワニ相手に死ぬ思いをして逃げた。弓が効かない相手は勘弁。

・白蛇の月、5日

どうせなら派手に行こう、ということでもリビトの里に行つて協力を仰いだら、普通に訓練相手を快諾してくれた。そしてポコポコにされた。ガツテム、こいつら絶対以前の恨みを拳に乗せてやがる。

とはいえ18階の水飲み場付近での訓練はそうとういい運動になった。おかげで心なしか、身体が軽くなってきた気がする。

・白蛇の月、6日

対モリビト戦、2日目。今日は模擬戦争訓練だ。

当然ながら、地域を特定されて集まられると人数に優位なモリビト達には絶対敵わな



い。なので隠れる場所のない平原は危険極まりないのだが、それを避けて小道のほうへ行ったらそこにすっげえ得意顔のモリコが大量の戦力を連れて待ち構えていた。

「行くと思つた場所に伏兵を置き、叩く。戦術の基本だろう？」

で、ふたたびボコボコにされる。くそ、いまに見てろよ。

・白蛇の月、7日

対モリビト戦、3日目。

イワヲさん（通称。本名、イワオロペネレプ）と戦闘訓練。モリコと違ってこっちは呼び名を気に入ってくれたようで、おーいイワヲさんと呼ぶと喜んでびーびー言いながら飛んできてくれる。モリコはすっげえ不満そうな顔してたけど。

そしてまたボコボコに。コルネオリがうまく動けないと雷もフェザースピアーも普通に対処できねえ。

・白蛇の月、8日

対モリビト戦、4日目。

オウガ+デモン相手に乱戦。だいぶ戦えるようになってきたが、やっぱりボコボコにされた。もう慣れてきたが、負けに慣れるつても嫌な話だ。ああ、早く全力で動きた

い。

・白蛇の月、9日

今日から3日くらいはモリビト達は黄金祝祭日とかだそうで、訓練は断られた。

で、ちょうど俺たちも動きがよくなってきたことだし、と8階の飛竜を相手に腕試し。楽勝。すげえ、俺たちって動けさえすればここまで強くなってたんだ……と、思っていたら、戦闘中に折れたのか笛みたいな形の牙を拾った。

それで、俺たちが帰って執政院に報告をしていたちようどそのとき、イケニ5兄弟の……ちよ、長男？ 次男？ 悪い、誰だか区別つかないけど、そのうちのひとりが泣きながら飛び込んできた。なんでも、8階で得体の知れない赤い竜に襲われたらしい。

即ミッション発動。因果はわからないがたぶんまたおまえたちが原因だろうから殺つてこいと。……この体調で？ マジすか。

・白蛇の月、10日

血戦を制したのは、イナー姉さんの一撃だった。

巢穴の新しい主、偉大なる赤竜。幸い巢穴の構造を熟知していた俺たちは、悠々と相手の背後を取ることに成功した。防御陣形を展開し、ファイアガード完備、チェイス剣

の準備オツケー、猛き戦いの舞曲が流れ始め——そこまでは、完璧だった。問題はそこからだ。

まず相手の、呪を含んだ咆吼がとんでもねえ。舞曲のおかげで精神は高揚していたが、そうでもない咆吼だけで立ちすくんでなにがなんだかわからなくなってしまう。そんなほどの威圧だった。いつ吐くか読みづらい炎の吐息のために、コルネオリはファイアガード固定、そうして防御がおろそかになったところに、冗談のような勢いで繰り出された尻尾によるなぎ払い攻撃が効いて、防御陣形を取っているにも関わらず一撃で全員がポロボロになった。

やがて陣形が崩れ、あと尻尾がもう一撃来たら間違いなくコルネオリが倒れるところまで追いつめられた。そうなるとファイアガードが持続できないので、俺たちの勝機はまずなくなる。だから速攻するしかないんだが咆吼による威圧のせいでまともに打撃が入れられやしねえ。コルネオリはファイアガードに忙しく、こりやジリ貧だな、と覚悟を決めかけたとき、イナー姉さんが奇妙な構えを取った。敵ではなく空を射抜く構え。鉄をも徹せ、サジタリウスの矢よ。そうつぶやいた彼女の手から放たれた矢は、しばらくして天空から槍となって飛来し、いままさになぎ払いに移行しようとしていた尻尾を射抜き、杭打ちのように地面にたたきつけて固定した。痛みと、行動を封じられたことに火竜が悲鳴を上げて立ちすくみ——咆吼による制約が薄れたその瞬間、シヨロ口

の大氷嵐の術式を乗せた俺の剣が、相手にとどめを刺した。

後で聞いたのだが、どうやら怪我をした後でパベールに教えてもらった技らしい。なるほど、そういえば使ってしまったねパベール。とこしえの魔竜を相手にゲシゲシと削っていくあの火力はたしかに凄いモノがあった。特に今回はそれがなければ勝てなかっただろう。と考えると、レン&ツスクル戦での負傷は怪我の功名だったのかもしれない。シヨロロは、対抗してこつちも電撃の術式とか覚えようかな、とか言っていた。……いや、対抗する必要あるのかソレ。

で、これも後で聞いたのだが赤竜はどうも例の牙笛から出る音が苦手だったらしく、そのせいで狙っていた住処を飛竜に取られてたとか。ところがその牙を俺たちが折ってしまったせいで、悠々住処を奪取することに成功した、ということらしい。あー、まあそりゃ俺たちのせいだわ。もう倒せたから誰も文句言わんけど、こういうこともあるから以後は気を付けよう。自然環境はどの桶屋が儲かるのか事前に判別しづらい。

## 第六階層（2）：散るもかなり

・白蛇の月、11日

またミツシヨン発動。なんでもグレイロツジが以前に倒した氷嵐の支配者が復活して悪さをしはじめたのでなんとかしてこいと——待て。なんでそれをグレイロツジじゃなくて俺たちに言う？ と聞いたら執政院の役人、え、だつてまた君たちがなにかやったから暴れ出したんだらう？ と真顔で返しやがった。ハハハ、否定しても説得力がない自分が憎い。

とはいえ、15階のあの湖をどう渡るのかというのは大問題ではある。筏でも作るか、とも思ったが、渡っている途中で竜に來られたらたまったもんじゃねえしな。どうしたものか。

・白蛇の月、12日

祝祭明けにモリビトの集落に行ってみたら、片づけでえらくごった返してほとんど相手にされなかった。

それで、かろうじて相手にしてくれたモリコと雑談。15階で困ってるんだよなー、

と言ったら、

「ではコロトラングルに乗っていけばよい。

速度は大したことはないが属性的に相性がいいからな。竜も好んで襲おうとはしないだろう」

と返された。そしてそのプランにシヨロロが大興奮。ミッシヨンとかはどうでもいい、ともかくコロトラングルに乗りたいたいという理由で決行確定。……最近、ギルド内での自分の発言力が急激に落ちているような気がするんですが、これは気のせいでしょうか。ぶつちやけそろそろシメたほうがよくないかアイツ。

で、とりあえず16階からの通路を確保して撤退。ちなみにシヨロロは最初にはしゃいでいたが、そのうちコロトラングルの揺れに酔ってうつむいてなにも言わなくなつた。お子さまめ。

・白蛇の月、13日

氷嵐の支配者を撃破。……あれ？ 弱くね？

相手なにもできない状態だったんだけど。ほとんどの攻撃はフリーズガードを抜けれないし、自分を強化しようとするればカチドキにペースを乱されてうまくいかない。グレイロツジと戦っていたときは氷の槍を生み出してマハに大ダメージを与えていた

りしたのでアレがコルネオリに來たらまずいなーと思つていたんだがそういうこともなく無事撃破。

まあ、いい運動にはなつた。エンタングルレイの影響もほとんどなくなつたことだし、そろそろ通常営業を再開してもいい頃かもしれない。

・白蛇の月、14日

グレイロツジが、活動停止した。

事件が起こつたのは30階の通路。前後から大量の魔物が——えーと魔竜10体と鳥15体と数えきれない量の白細胞、ですか。ハハハそんなの聞きたくもねえ。ともかくそういうとんでもねえ量の敵に襲われたグレイロツジは、当然のように倒れ……なかつた。

なにしろフロントガードとバックガードが同時にできるパーティだ。柔らかいのもワテナしかいないし、ムズピギーの呪歌が長期戦における体力をサポートする。火力はワテナとオコナーに任せろ。てな感じで、襲い来る敵を片端から焼き払い切り捨て、ついに全滅させてしまつたらしい。もうぶつちやけ人間の所行じゃねえよソレ。

とはいえさすがのあいつらも無傷とは行かなかつた。特にロッドテイルはあばら骨にヒビが入つたそうで、それでもそんなもん怪我のうちに入らん！ とか言つていたが

歳を考えるとマハに説教されてしぶしぶ入院。他のメンバーも大なり小なり怪我をしているので、大事を取ってしばらく休むことにしたらしい。

そして俺たちにミツシヨン発動。おそらくは30階にいますと思われる、魔竜たちを動員してグレイロツジを襲わせたり、ヴィズルのクローンを作ってロツクエツジを襲わせたりした黒幕。そいつをどうにかしてこい、というものだ。

通常営業どころの話じゃなかった。真正銘、誰もたどり着いたことのない場所に住まう未知の強敵。おそらくは俺たちにしかできない、これまでにない大ミツシヨン。その発動を受けて、シヨロロは腕が鳴るね、と楽しそうに言った。イナー姉さんは怖いから行きたくないなあ、とぼやきながらさつさと弓の手入れを始めた。カチドキは未知の文物を目にできる機会に大興奮していた。コルネオリはいつものようになんにも考えてない。……緊張感ねえな。と思いつつ、まあ今回もなんとかなるだろ、と思っっている俺もきつと同類なんだろう。染まっただけかもしれないけど。

・白蛇の月、15日

かつてロツクエツジと共闘したときにあらかた地図を作り終えていたせいで、あつさり27階は素通り。28階の水飲み場で休憩しつつ29階へ。

グレイロツジの報告書によると、あまりにわけがわからなので地図なんて作れませ



ん、だそうな。なんだそりや、と思いつつ探索開始——がー！　なんだこのわけのわからねえ階は！

いろいろ抜け道みたいなのが入り組んでいてどこをどう行ったらいいのかわからん。法則みたいなのはかろうじて掴めるんだが、途中から本気で2択、3択、4択を迫られまくった。どうしようもないので巨大な亀がうろうろする回廊で亀を全部倒してから撤退。明日はどうかかな……

・白蛇の月、17日

探索、続行中。

トライを繰り返すうちに時間が経ちすぎて体力が尽きたのでいったん28階にもどって水飲み場でキャンプし、もう一日かけてようやく30階への道筋を特定してから撤退。明日はとうとう、現行で知られている樹海の最下層を探索だ。気合い入れていこうぞ！

・白蛇の月、19日

30階は、まるで人間の腸みたいにくねくねと曲がりくねった一本道の続く場所だった。

竜と鳥はもう駆除されていたが、なんか赤い変な生き物とか剣が効かないサソリとかがウヨウヨしていてシャレにならない。かろうじて体力が尽きる前に水飲み場を発見し、一息ついた。助かった……砂漠でオアシスを発見した探検隊の気分ってたぶんこんなだろうなー。

で、キャンプ。よく考えたら、こんな風にキャンプしながら探索するのは3度目だ。1度目は8階で試験のため。2度目はモリビトとの決戦に打ち勝つため。こいつらともういぶん長い付き合いになったなあ。いつの間にか、一緒にいるのが当たり前みたいになっちまった。

そうして活動再開し、26階への隠し通路を発見したのでいったん街へ帰還。明日はいよいよ決戦、準備は入念にしないと。

・白蛇の月、20日

樹海の奥の奥、扉を開けた俺たちを待っていたのは、火氷雷それぞれの竜のクローンだった。——あ、死ぬ。とか思った。あのときは。マジで。

で、戦闘。フリーズガードを連打しながら火竜を殴りまくるが、間隙を縫って繰り出された雷竜の打撃がコルネオリを直撃、あえなく気絶。まずい、負ける、と思ったその瞬間、銀の光が走って一撃で火竜がぶち倒された。——抜刀氷雪。刀を再び鞘に収めた

レンは笑って、

「どうした諸君。

こんな連中は私とツスキルより数段弱い。君たちに勝てない相手でもあるまい。よもや、緊張して実力が出せていないのではあるまいな？」

無茶言うな、と思ったがその言葉にシヨロ口が大反応。やろうよアイノテ、どうせ氷竜なんて攻撃する前に削っちゃえば大丈夫だよつ、と言つて大爆炎連打。そしてマジで勝利。いやもう、気合い入れればなんとかなるんだな〜とか若干危険なことを考えた。

で、いったん水飲み場まで撤退してレンと会話。どうやら、ここは樹海を生み出した素となるモノがいる場所らしい。ヴィズルから昔聞いたところによると、ソイツは普段は森の維持のための活動しかしらないが、世界樹に危害が及ぶと樹海の中にいるべきでないかと判断した相手をなんとかしてでも排除しようとするモードに入るとか。おそろく、グレイロツジとヴィズルの戦闘によってそのモードに入ったソイツが、今回の様々な事件の元凶なのだろう、ということだった。

「ソイツ——フォレスト・セルはヴィズル達が設定した通りに動いているだけだ。そしてソイツは、ヴィズルを世界樹を守るモノの象徴みたいに捉えていたんだろう。だからコピーを作り出して戦わせたりした。まあ、結果としてヴィズルの遺志を果たそうとしているという意味で、幽霊というのは不当ではない評価かもしれない」

レンはそう言う。なんだよ、ならまたやるのか、と言ったら彼女は悲しそうに、「もう、やめたよ。」

ヴィズルがなにを考えていたのかは知らないけれど、もうそれは過去のものでしかない。こだわつてもしようがないさ。

——アイノテ、君が言ったとおりだ。死んだモノのために誰かが襲われ傷つくなんて馬鹿げている。引導、渡してやってくれ」

と、言った。

レンが言うには、ヴィズルはレンに次のようなことを言っていたらしい。なにかの間違いでフォレスト・セルが動き出したら自分が止める。ただし万が一自分が留守のときはレンに対処をお願いする。本体に強力な打撃を与えれば活動を停止して再起動するはずだ。対処のために、フォレスト・セルの戦闘プログラムの概要を渡しておくから参考にしてくれ——という話だ。要するに強く叩けば直るということらしく、そのための対処策もおおまかには教えてくれたらしい。

共闘しよう、と言ったのだが、レンは首を横に振った。

「フォレスト・セルの起動中、周囲にフォレスト・セルの細胞たちが大量に集まってくる。それをだれかが止めないといけない。」

私はモリビト達に任せるつもりだったが、彼らは長い戦争の影響でだいぶ戦力を失っ

ているし、——正直、これ以上彼らを巻き込みたくない。だから、私が止めるのでそのうちに君たちがフォレスト・セルをなんとかしてやってくれ」

そして、決戦。

先ほど3竜のクローンがいた場所の、さらに奥。そこに、いままで見たどんな生物とも違う、禍々しい姿があつた。

勝てるかな、とシヨロロが言つたので、勝てるだろ、と答えた。いままで俺たちはこのメンバーで数多の強敵を打ち破つてきた。今回もきつとそうなるさ。

相手が唸る。俺はレンから教えられた対フォレスト・セル用戦闘手法を反芻する。最初の攻撃はエクस्पロウド。火竜の炎もかくやというレベルの超火炎だ。対抗するためには、コルネオリがガードするしかない。カチドキが歌い始め、イナー姉さんが全員動きやすいようにと指示を飛ばす。すげえ、こんな技術も知つていたのかこのひと。そうして最初の炎をかわした俺たちに対して、フォレスト・セルは強烈な威圧をかけてきた。——王の威厳。カチドキの歌が止まり、行動が乱れる。ヤバい、いきなり乱された!? このタイミングで炎でも来たら死ぬ、と思つたのだが、フォレスト・セルは変な粉を全体に撒いただけだった。助かった、と思つたのもつかの間、いきなり強烈な睡魔に襲われてひびきをつく。まさか毒ガス! くそ、予想外だ。イナー姉さんとカチドキも肌が石のように堅くなつて行動が制限され、コルネオリはうわあ目が見えないと叫び出し

た。もうダメかと思ったところにシヨロロが薬を撒く。テリアカβ。全員かろうじて復活。しかしフォレスト・セルから次の攻撃が！　と思つたらコルネオリが当てずっぽうに振り回した盾に相手の触腕がぶち当たり、威力が減殺された攻撃ではイナー姉さんを倒すことはできなかった。ラッキー！

だがうかうかはしてられない。そろそろ次の大攻撃の連打、すなわちサンダーストーム↓エクस्पroud↓フリージング連鎖が来る。コルネオリはガードを準備、俺とシヨロロは迎撃用意を固め、その間にイナー姉さんが――すげえ、一度に3本も矢を撃ち放つた！　強烈な打撃にフォレスト・セルが悲鳴を上げる。さらに前と同様上に向けて矢を放つて、そしてカチドキの呪歌が全員を鼓舞する。態勢が整つた、と思つた瞬間に王の威厳サンダーストーム王の威厳エクस्पroud王の威厳フリージングむきー！　態勢が一向に整わないままジリジリと時間が過ぎ、そしてふたたび相手の毒ガス攻撃。うわ目が見えなくなつた！　慌ててカバンからテリアカβを取り出してあたりに撒く。幸い、コルネオリはちよつとした呪を受けただけで無事だったので、次の炎にはファイアガードが間に合つた。

とはいえ、偶然保つていることは当然こちらも承知している。こうなつたら速攻しかねえと腹をくくつた俺たちは態勢を整えつつ猛攻。だが火力が足りねえ！　くそ、せめて俺がスタンバツシュでも使えればいいんだが、シヨロロも俺も多勢を相手に属性戦を

行うことを主眼に入れたスタイルなので攻撃力が若干足りない——と言った瞬間、シヨロロが

「あ。電撃の術式、忘れてた」

あ、じゃねえよバカ。さっさと使えー！

はい勝ちました。最後、相手がなにか危険なコトをやろうとしたのが見えたがギリギリこちらの勢いのほうが上だったらしい。まったく、最後まで締まらねえ話だ。——それも俺たちらしいっちゃらしいけど。

## エピローグ：次の冒険へ

・白蛇の月、21日

帰ってきたら英雄扱いだった。

まあ、悪い気はしない。相手はとんでもないバケモノだったが、運と知識に大いに頼っていたとはいえ、こうして勝つことができたのだ。いちおう褒められていい結果は出したって言うていいだろう。

異変は去り、樹海は平穏を取り戻した。第六階層もこれからはずいぶん行きやすい場所になるだろうし、ひよっとしたらさらに奥へ探索が進むのかもしれない。樹海を生み出す素となるモノは30階にいるが、さらに下がらないとは限らないし、なかったとしても未知の素材がたくさん眠る樹海は十分に魅力的な場所だ。

そしていつものように金鹿の酒場で宴会。バカ騒ぎが続き、カチドキがうまくもない歌を歌い出す。すぐにムズピギーとチクタクが寄ってきて伴奏を始め、周囲はやんややんやの大喝采。とんでもねえ騒ぎになった。

で、宴も一段落してバカも体力を使い果たし、ほどよく静かになってきたところで、俺はその話を切り出した。——そろそろ引退したい、と。



最初に反応したのは、なんとコルネオリだった。やめないでくれよ、アイノテがいなかったら僕たちどうすればいいんだよーと言って泣き出す。……しまった、こいつ酒入つてると人格変わるんだっけ。おまけにカチドキもそれに唱和し、なんでやめるなんて言うんだと詰め寄せられた。

なんでもなにも、俺がもう限界だと思つたからさ、と言つたのだがぜんぜん聞いてくれやしない。堂々巡りが続き、いい加減うんざりしてきたところでイナー姉さんが、まあ当人が決めたならしょうがないかな、と言って、それで一応議論が収まつた。

なんとなく宴つて雰囲気でもなくなつてしまつて、気まづいまま宿屋へ。部屋でこの日記を書いていたら、その途中でドアをノックする音がした。

ドアの向こうには、さつき一言も発しなかつたシヨロ口がいた。真つ青な顔をしていたのでどうしたと問うと、やめちややだよアイノテ、置いていかないで、と言って、そして泣き出した。

……参つたね。覚悟はしてしたがここまでの反応が返つてくるとは思つていなかった。とりあえず泣き疲れて眠つてしまったシヨロ口はイナー姉さんに預けたが、去り際にそのイナー姉さんからも非難がましい目で見られちまつた。四面楚歌か。

・白蛇の月、22日

なんとなくみんなと顔を合わせづらくなって酒場へ。

あいにくまだ準備中の時間だったが、店内を見たらアシタがひとりでちびちびやっていた。……不良め。昼間っからなにやっつてんだよおまえと聞いたたら、キミに言われたくないなあと返された。そりやそうだ。

アシタもまた、俺がやめると言い出したのは知っていたようだった。さすがに違うギルドであるこいつは俺の決定に反対したりはしなかったが、

「でも変だよ、キミ。」

樹海も平和になって、ようやく安定して儲けられるようになったのに、なんでいまやめるのさ？」

と聞いてきた。

俺も、なんとなくこいつには本当の理由をしゃべってもいい気がしていた。なので、まだ誰にもしやべっていない、俺が引退する本当の理由を、話すことにした。

そもそも、いまのホイスビーはオーバーワークなのだ。

いろいろあつて長期間フル稼働せざるを得なくなっちゃったし、結果として大物を退治したりした。けど、それは本来の俺たちの実力からはかけ離れた業績だ。なんとかいままでやってこれたのは運もあるし、勢いみたいなものもあつたんだろうが、このまま突っ走っていたらいつか破綻するのは目に見えている。

けど、ホイスビーは有名になりすぎた。このままだと俺たちがブレーキを望んでも、周囲がそれを許してくれない。もう崖っぷちなのに、後ろからどんどん押してくるから戻れやしない。どうにかしようと思えば、一度ホイスビーと呼ばれるもの自体をぶっ壊す——俺には、それしか思い浮かばなかった。そういうことだ。

「で、やめることにしたワケ」

アシタはそう言つて、納得したようにならずいた。そして、

「バカたれ。」

そんなんだからみんなに怒られるのよ、キミは」

と言いつ放つた。……そんなんつて、俺なにか悪いことしたか？　と問うと、

「だつて誰とも相談してないでしょ、それ。」

照れくさいんだかなんだか知らないけどさー。そういうのつてみんなで決めるのが筋でしょ？　勝手に決めたら揉めるに決まつてるじゃない。あつたま悪いなーホント」

……それをおまえが言うか。自分勝手大王。

「あたしはいいのよ。天才だから。」

で、どうするの。やめるのはいいとして、このまま身勝手に物別れバイバイで済ますわけ？　キミたち、そういう気まずい別れ方で済ましていい仲だった？」

あーもう、わかつたよ。

まさかこいつに説教される日が来るとは思わなかった。参ったね。この街には俺にとつて頭が上がらない人間が多すぎる。

ともかく、そうと決めたら善は急げ。去り際、アシタに一言だけ、ありがとよ、と言つた。相手はきししと笑つて、惚れるなよ、と返してきた。

宿に帰つて、みんなを集めて俺はさっきのことを説明した。俺だけじゃなくて、ホイスビーという形自体がもう、一度壊さないといけないものになっていること。そのために、俺が出て行くのがたぶん最善だろうということ。

カチドキとコルネオリはまだ不満そうだったが、イナー姉さんが俺の味方になってくれた。そして、またシヨロロはなにも言わなかった。

……ともかく。これでお膳立ては整つた。出立の日は、明後日と決めている。どこに行くかはまだ決めていないが、冒険者稼業のおかげで金はそれなりにあるし、どこに行つたつてそれなりにやっていけるだろう。元よりこの身は根無し草、樹海は不釣り合いに過ぎる。つてね。

・白蛇の月、23日

グレイロッジの道場に行つて挨拶。

もう退院していたロッドテイルは相変わらず。俺が街を出ると言つても、ふん、とし

か言わなかった。マハは寂しくなるねー、でも恋しくなったらいつでも帰ってくるんだよ、と言った。……最近ようやくわかつてきたが、こいつ俺のこと子供扱いしてないか？

後はいつものように。俺がいなくなつて困る人間がいるわけでもなし、まあこんなもんだらう。世話になつた何人かにも挨拶回りは済ませておいた。後は心置きなく、旅立つだけだ。

そしてシヨロ口は顔を見せもしない。参つた、本格的に機嫌を損ねちまつたかね。せめて見送りくらいは来てくれないと寂しいんだが……まあ、仕方ねえか。

・白蛇の月、24日

出立の日。

あんまり湿っぽいのも嫌なので、早めに出立することにした。見送りはカチドキとコルネオリとイナー姉さん。やつぱシヨロ口は来なかつた。

カチドキはまだ納得していないようで、わたしたちならグレイロツジだつて目じやないのにさー、とかぶーたれてる。無茶言うなよ。こいつも過剰極まりない自信だけは誰にも負けねえな。

コルネオリは、案の定泣いていた。寂しくなるよお、と言つて。……今日は酒入つて

ねえはずなんだけどな。こっちは逆に、実力に見合わないほど気弱なんだよな。不思議なことだ。

イナー姉さんはいつもの通り。落ち着いたら便りをよこすようにね、とだけ言っただけで笑っていた。このひとはホント強いなあ。どうして戦闘中だけあんなへつぴり腰になるのかよくわからん。

あんまり話し込んでいると出立する気がどんどん減っていくので、俺は早いうちに切り上げて出ることにした。また、月日が経てばこの街にもどってくることもあるだろう。そのときは、みんな笑って語り合えればいい。

そのときまで、しばしの別れを。

そして街の門を出る。とりあえずシリカ商店で近くの地図は買っておいたのだが、あんまり行き場所は決めてない。なにしろエトリアは樹海が見つかるまでただの田舎都市だった場所だ。近隣の地域も似たようなもので、そうとう遠くまで行かないとソードマンの就職口は探せないな—とか思っていたら、ばたばたとえらく騒がしい足音。あ、こりやヤツだな。と予感して振り向くと、案の定そこにいたのは——って、なんだそのでけえ荷物。聞くと、シヨロ口はぜえぜえ言いながら、

「だ、だって、遠くまで旅するんでしょ？ だから」

だからじゃねえよ。まさかテメエついてくるつもりじゃねえだろうな、と言ったらヤ

ロウ、いかにも当然という顔で

「当たり前。だつてアイノテ、ボクがいないとただの使えないソードマンじゃない。チエイサーにはアルケミストがいないとね」

……いや。いやいや待て。そもそもテムエ親がこの街にいるんだろ、と言つたら、

「そんなの、当然許可もらつてきたに決まつているじゃない。ボクがなんのために昨日一日かけて家にもどつていたと思つてるのさ。父さん説得するの、けつこう大変だつたんだからね」

と言つて、はいこれが証明書、と一枚の紙をよこした。……手紙かよ。うわアイノテ様とかすげえ達筆で書いてある。中身読むの怖いんだけどこれ。

「じゃ、そういうことでまずは南下して海に出よう。船に乗れば陸路よりだいぶ早いし。どうせアイノテ、行くところ決めてないんでしょ？ ボクね、見てみたい場所が山ほどあるんだ！ すごく楽しみ！」

言つて俺の腕を引っ張るシヨロ口は、もう俺の返事とかどうでもいいといった風情ではしゃいでいる。——あー、ダメだ。止める言葉が思い浮かばねえ。つーかなんだかんだ言つて、俺はこいつにからつきし勝てねえんだな。

まあ、こんなのもいいだろう。

道はまだずっと遠くまで続き、俺たちの冒険も、まだまだ終わりそうにない。

それでも。コイツと一緒になら、たぶんどこでも楽しいはずだ。  
——次の冒険が、始まる。



## アイノテ世界樹日記：あとがき

というわけでこの作品はこれで完結です。

見てわかる通り、出てきたキャラクターは全部、僕が世界樹の迷宮をプレイしたときにキャラメイクしたキャラか、NPCです。

世界樹をやったことがあれば「あーこんなクエストあったなー」というところも随所にあつたと思います。だいたい時系列順に消化したつもりですが、作劇の都合上、第四階層の突破より先にアルルーナやマンティコアを倒すなど、一部変形してあります。

微妙に投稿時に悩んだのが「オリ主」タグをつけるかどうかでした。

いや、世界樹の迷宮の「PCキャラ」って、オリ主なんでしょうかね。それとも公式キャラなんでしょうかね。悩むところです。

一応タグはつけませんでした。まあ、世界樹の迷宮が原作である以上、原作知ってる人ならそのへんはわかるだろうと思つてのことです。ご承知置きください。

あとそういうば、いちいち訂正はしませんが、最初の注意書きで述べたのに大嘘がひとつありました。ケルヌンノスで詰んだのはパラディン単騎縛りですね。詰んだ理由は十字の種子を手に入れる方法がないから。で、レンジャーで行ったら20階までは単

騎で行けました。さすがにイワヲさんは無理でしたが。

さて、では一応、出てきたメインギルド3つのキャラクターの終了時の状況を軽くざっと書いて、終わりにしましょう。ほとんど出てこなかったグレイロツジのバードとアルケミストは省略で。

・ギルド「ホイスビー」メンバー

1) アイノテ

クラス：ソードマン アラインメント：Law—Neutral 性別：男 年齢：1

8

パーティ内の役回り：突撃するシヨロ口を止める役。参謀。戦隊もので言うならば。

どう考えてもリーダーではない性格なのだが、他にリーダーでできる奴がいないうせいでリーダーをやることに。

背負い込む性格なのでストレスとかすごかったと思うが、新天地ではもつと楽しくやれる……か？

2) シヨロ口

クラス：アルケミスト アラインメント：Chaos—Good 性別：女 年齢：1

パーティ内の役回り：切り込み隊長（注：アルケミストです）

なんか気づいたらヒロインになってた子。

たぶん全キャラ中最も熱血。戦隊ものならレッド。理屈による鬱展開を力でねじ伏せる！それがスタイル。なんでこいつアルケミストなんだろうね？

ちなみに13にしてはかなり背が高いです（アルケミストの、金髪の絵の方）。そのせいでアイノテには最初、男かと勘違いされていたり。でも最終的にはちゃんとヒロインしていたのでまあ、よし。

3) コルネオリ

クラス：パラディン アラインメント：Law-Good 性別：男 年齢：16

パーティ内の役回り：準切り込み隊長（注：パラディンです）

気合い満々、そしてなにも考えず突撃、が信条のパラディン。とりあえず盾に隠れて突撃していればなんとかなると思っっているっぽい。たぶんこのギルドでいちばん単純な意味で強いキャラ。

途中からまるでギャルゲーの古典的脇役男キャラのような空気っぷりを見せたが、彼には彼の物語があるのです。……たぶん！なんとなくアシタさんへの憧れを捨てれば無難に幸せになれそうな気がする。魔性の女、アシタである。

4) イナー

クラス：レンジャー アラインメント：Neutral—Neutral 性別：女

年齢：21

パーティー内の役回り：万能裏方。

いや、世界樹初代ね、レンジャーとメディックは本当にバランスぶつ壊れてるんで……おかしいでしょこの能力。採集でパーティーの手助けをしつつ罫床などを無効化しつつアザステで戦線を安定させてサジ矢で敵をぶちのめす。何役できるんですかねこれ。

一応文章中では地味ですが、このひといなかったらギルド壊滅してます。気弱で自己評価低めだけど存在感はコルネオリより上。なんなんですかねこのひと。

5) カチドキ(カチドキR)

クラス：ジャーナリスト アラインメント：Chaos—Neutral 性別：女

年齢：19

パーティー内の役回り：情報収集と回復。

ジャーナリスト気取りの困ったバード、のはずなのですが……一応使えたバードの能力が大活躍。たぶん一番パーティーに依存していないキャラなので、今後も世界樹を巡る冒険を引っかけ回しまくるでしょう。

・ギルド「ロックエッジ」メンバー

1) アシタ

クラス：メデイック……？   アラインメント：Chaos—Good   性別：女   年

齢：15

パーティー内の役回り：メイン火力の一翼。

最初は日記内に直接登場しないはずだったが、異様な存在感でサブヒロインみたいな座をぶんどっていったサイボーグ馬鹿。

勝手に暴れ出したとしか言いようがないんですけどねこれは。第三階層の日記での彼女の行動はひとつの例外もなく書いている途中に勝手にこいつが暴れ出してああなりました。おかげで、コルネオリの思惑とは裏腹にロックエッジはどんどんホイスビーのライバルギルドと化していくという。たぶんコルネオリ空気化の最大の主犯。

2) ハラヘルス

クラス：ダークハンター   アラインメント：Law—Neutral   性別：女   年

齢：14

パーティー内の役回り：サポート火力。

鞭系極振りダークハンター。ナリアンテスと違って縛りスキルを極めています。な

お、ダークハンターにされたのはアシタに無理やりであり、本来は清楚な美少女です。清楚な美少女にジエンド極めさせるアシタマジ悪魔。

3) チ・フルルー

クラス：ソードマン アラインメント：Neutral-Good 性別：女 年齢：19

パーティ内の役回り：メイン火力の一翼。

たぶんロックエッジが火力馬鹿である最大の由来。アシタとタメ張れるどころか押さえ込めるレベルの斧極振りソードマン。なのですが、アイノテとはまったく別方面に自己評価が低く、「いえいえー。わたしはただ単にアルバイトで樹海に行ってる一般人ですのー」とか言うエトリア最強のソードマンです。馬鹿みたいに強いよ！

4) カチノヘ

クラス：カースメイカー アラインメント：Chaos-Evil 性別：男 年齢：14

パーティ内の役回り：ハラヘルスのストーリーカー兼お荷物。

想定の上の方向で大活躍したシヨタ呪い師。シヨタのくせになかなか経験豊富(?)。ハラヘルスをめちやくちや気に入ってつきまといっているが、一線を越えた外道な真似をするとアシタストライクが頭に飛んでくるのでいまいち踏み込めない様子。

## 5) パーブル

クラス：レンジャー アラインメント：Neutral—Neutral 性別：男  
年齢：15

パーティ内の役回り：ブレーキ役。あと胃を壊してぶっ倒れる役。

地味な性格で目立たないけど、そこはレンジャー。イナーを越えるレベルと攻撃特化の能力で相手を制圧します。そしてアシタに制圧されます。

アシタさえ幼なじみでなければ、こんなに苦勞せずに済んだでしょうにねえ……しみじみ。

## ・ギルド「グレイロツジ」メンバー

## 1) ロツドテイル

クラス：パラディン アラインメント：Law—Good 性別：男 年齢：42  
パーティ内の役回り：リーダー兼メイン防御担当。

エトリア全体の冒険者の主みたいな存在。どっしりした構え、ずっしりした性格、頑固一徹の性格、走り出したら止まらない試練に次ぐ試練。ははーん実はこいつツンデレだな？

なお、パーティ内では、ごく普通のパラディンとして振る舞っている模様。なぜかと

いうと、相棒のマハが強すぎるので立場があまり高くないのです。外弁慶？

2) マハ

クラス：パラディン アラインメント：Neutral-Good 性別：女 年齢：

15

パーティー内の役回り：防御寄りの万能キャラ。

グレイロτζ道場の師範代。知らなかつたアイノテはタメ口利いてますが、知ってるひとたちはあの場でガクブルしました。ただまあ、当人かーい外人さんみたいなのりなんで、あんまりそういうの気にしてませんが。いざゆけボウケンシャー！ とか言つてても違和感ない。

もともと陰でサポートすることに慣れた役回りなので、他のギルドへの助言、サポートはお手のもの。でもいちばん重要なのは、無茶する冒険者を一喝して止める係。ついつい無茶しがちなグレイロτζジがギルドとして大成したのも、実は彼女の適度なブレーキあればこそ。それをわかっているからロツドテイルも彼女には頭が上がりないのですねえ。

3) ワテナ

クラス：ブシドー アラインメント：Neutral-Neutral 性別：女

年齢：18



パーティー内の役回り：生きる暴力。

構え？ なにそれ？ と言いつつ踏み袈裟で1ターン一殺する狂気のブシドー。

こいつがいるからこそ、半端な状況でグレイロツジが壊れないんですなー。アルケミストの火力の後押しがあるとはいえ、雑魚とかボスとか関係なくぶち殺す彼女は本当にヤバイ。

あ、ちなみにフルネームは「ワテナ・チャウネン」です。カナガワ地方出身。名前の響きについて訊いた人間がその後生きていたところを見たものはいないという物騒な噂があります。

さて、このへんでこの作品はお開きにしましょう。

次回作「イルミネ世界樹日記」はこの作品より後の時代、ハイ||ラガードを舞台とした作品です。

乞うご期待！